くらしと教育をつなぐ

# We

特集　汚れとつきあう

8・9月号

## 女と男の家庭科 新時代

くらしと教育をつなぐ

# We

8・9月号

《インタビュー》複眼でみる

上條茉莉子さん　（インタビュアー 間瀬中子）……38

「仕事も好き、遊びも好き」

連載

● かりん区便り　佐藤通雅……46

● 現代衣生活考　むらき数子……48

● 地域の暮らしと家庭科教育　石川尚子……52

● リレーエッセイ
産む・産めない・産まない（3）　小堀直子……54

● ヤング・イン・ワンダーランド
続・日本人　加藤由美子……56

● からだに やさしく しなやかに
河村ふみ・加藤由美子…58

◆読者の広場……60

購読のおねがい……67

編集後記……68

表紙デザイン／加藤由美子　目次／アトリエ・ネット　題字・カット／小林敏也,若竹ごじら稜子,片岡誠

くらしと教育をつなぐ
We
1992.8.　　自立した女と男を

〈インタビュー〉
シリーズ　男を尋ねる
蔦森　樹さん　（聞き手 諸橋泰樹・重川治樹）
「男をやめてみたら…」 ……4

## 女と男の家庭科新時代

■ 家庭科―遊ゆう・惑わく
―強姦を考える―　小林由佳・浅井由利子 ‥10

■ オホーツクの潮風荒く …番外編 その3
―コンドームをつけてといえるようになってね―　江口凡太郎 ……18

★ 家庭科情報 ……20

## 特集 “汚れとつきあう”

♬「ゴミ」とつきあう　香嶋正忠 ……22
♬ ゴミと地域デザイン　諫山陽太郎 ……24
♬ 石けんシャンプー美容室を開いて　木浦妙子 ……26
♬「清潔志向」を見直す　小松文子 ……28
♬ 環境サミットから　相川康子 ……30

◉ はつげん ……33
◉ 私の本棚から　西本和代 ……35
◉ グループ紹介 ……36

シリーズ

# 男を尋ねる ③

## 蔦森樹さん

（男をやめてみたら……）

「強制としての男」に疑問を持ち、そこからの解放を実践する新しいタイプの男性たちがいる。
トランスジェンダー。男性が女装するなどして自らの性を超える。そこから見えてくるものは？　そこにおける男と女の関係とは？
それは解放に繋るか？
　蔦森樹さんに、オルターナティブな男性の可能性を尋ねた。

聞き手
諸橋泰樹
重川治樹

■つたもり・たつる
ライター。一九六〇年生まれ。『男だってきれいになりたい』（マガジン・ハウス）、『現代のエスプリトランスジェンダー現象』（至文堂）などの著書の他、数多くの論文、エッセイ、インタビュー記事がある。最近、小説『そして、ぼくは、おとこになった』（マガジンハウス）を発表。

## トランスジェンダーをすることで見えてきたもの

**蔦森**　最初に、女装というか、私自身のトランスジェンダー経験についていうと、今の社会は、広告の世界をはじめとして、女性の身体や女性の性的なものが記号化されて溢れていますよね。それらがみんな、男である私に対して、欲情せよ、勃起せよ、と迫ってくる、そして欲情させられてしまっている自分に、ある日気づいてしまったんですよ。

自分は、男であって女ではないという「醜いアヒルの子」で、しかもパブロフの犬のように、社会における女性についての性的メッセージで条件反射的に欲情してしまう。そういう自分がたまらなくなったのね。で、大雑把にいうと、「男性」であることをやめて「女性」に越境してみたわけ。このあたりのことは、『男だってきれいになりたい』を読んでほしいんだけど。

女装してみてわかった最大のことは、男でも似合うんだ、男でもやれるんだということ。いかに社会・文化的なジェンダーとしての男というコード、女というコードをまとって、自分ががんじがらめになっていたかが、まさに身をもってわかった。男でも似合うものは似合う、ただみんなやらないだけなの。だからやってみることをお勧めしますけど、頭で思い描いていたイメージとは違うことにクラクラしますよ。自分の今までの思い込みや差別観、偏見なんかが全部出てきて、自我が危うくなるくらい。

自分の身体性や身体観がわかるんですよ。たとえば、男の人で握手をする時に相手をグッと強く握るような人は、自分の身体のつかまえ方も破壊的な人だと思う。そういう人は、女の人に対しても暴力的な人なんだと思うんですね。けれど、女装することによってやさしい感覚というか、自分の身体をやさしく扱う、そして他の人にもやさしくなれる自分ができるんですよ。しぐさや姿勢から、声までも変わります。本当にびっくりした。男も女も「性」の蓋をされていたんだって。

**諸橋**　しかし大多数の男たちは、社会に溢れている性的メッセージのシャワーを、蔦森さんのように暴力的欲望発生装置としては気づかないし、それをすら楽しんじゃっていると思うんですが。

**蔦森**　そういう人はそういう人で、もういいの。だけど、それは絶対どこかで爆発する。そうならないはずないも

の。

## 思い込みは自己保身から

**重川**　諸橋さん、女装してみたいと思ったことありますか。

**諸橋**　うん、ある。特に小学生ぐらいまでは女の子になりたかった。ただその後、自分がいわゆる現代の美の基準からするときれいでないことに気づいて、男を演るようになったけれど。

**重川**　私なんかも、隠れて化粧したりスカート履いてみようかなと思うことはある。けれども周りの役割混乱が面倒くさくて、とりあえずやっていない、というより、排除されるのが怖いからなんでしょうね。

ぼくは父子家庭をやるようになって、女性との関係での支配・被支配関係に気づき、それをやめるにはどうしたらいいかということで蔦森さんのお話に興味を持ちました。Weではここ数年、「男の解放」について自分たちなりに考えてくる中で、男社会の高速道路から下りる・下りない、あるいは下りられないということが問題になっているのですが。

**蔦森**　そんなことはない。たとえ大怪我をする可能性があるとしても、時速百キロで走っているクルマから飛び下りるという選択肢はありますよ（笑）。それは、下りないための言い訳にすぎないと思う。

高速道路を突っ走る大多数の男たちが所属する世界の価値観は、カネと権力とオンナですよね。ところが、男らしさや仕事人間といった高速道路を下りたこっち側は、カネと権力はないけれど、女性たちは多く（笑）、しかもあたたかい関係で楽しそうにやっている。彼らに、「こっちの水は甘いぞ」と言う方途はありますよ。

でも、こういったことは個人がそれぞれやることで、一緒にやろうというような、連帯とか多人数でとかいう問題ではない。要は、女装にしても男らしさにしても、思い込みに対してその人がどうするかだけですよ。

## 男のセクシュアリティは暴力性しかないか？

**重川**　現在フェミニストの間で、「見る男」「挿入する男」といった男根主義的セックス、つまりヴァギナ・エクスタシーはもうたくさんだという主張が出てきていますよね。インターコース（性交）そのものが男性による

暴力であると。そういった男性の暴力性を排した先に、一体男性はどうなるのかが興味あって、蔦森さんにうかがいたいのですが。

**蔦森**　「セックス」イコール「男と女のインターコース」にとらわれていること自体が、やはり問題ですよ。相手の女性がインターコースにこだわっていることもあるでしょうし、よく言われるのと逆に、男が欲情される側になることだってあります。抱く女―抱かれる男という関係でなければ満足しない、という女性もたくさん知っています。インターコースは選択肢のひとつなんです。男女のセックスへの思い込みが今の社会は強すぎる。もし、本気で相手とわかりあいたいのに相手がインターコースをいやがれば、ほかの仕方・愛し方を考えるでしょう。

私自身、それまでマッチョなモードでバイクについてのライターをやっていたのから、女装をして、男性をやめつつ、ヘテロセクシュアル（異性愛）で女性と暮らしたりしていたんだけど、それがもとで女性との関係がうまく行かなくなったということは、あまりなかったですね。相手があることだから、マッチョな男を求める女性だったらそれはうまくいかないこともあるけれど。でも、どちらかというと私は、女性に「受け入れてほしい」タイプの男だったけれど、それは昇華してしまって、今は「受け入れる」になりましたね。

だいたい、男性は相手に対して、この人は何？　いったい何を考えているの？　といったことをつきつめることをしなさすぎますね。相手が何を言っているのかを聞き、受け容れる能力、自分はこう思うと言う能力が足りない。女性は、男性が百パーセント向き合ってくれないから、怒るのではありませんか。もちろん、相手と百パーセント向き合うのは大変なことだけれど。

セックスや暴力でしか自分のパワーを出せない男性というのは不幸ですよ。そうでないパワーの出し方を身につける必要があると思いますね。「男の」セックスといった「マス（集合）」でセクシュアリティをとらえない方がいい。「私の」と言うしかないんですよ。

**重川**　なるほど。今のお話でわかってきました。五月号の福島瑞穂さんのインタビューにも出てきましたが、最近、フェミニスト的な男性はあまりセクシーでない、ということが、女性の側から、言われていますが、それは、自分自身の中のおとこ性をマッチョ的に出したくないと

いう、「フェミニズムに近づいた男性」が、パワーというかエネルギーの出し方を間違っているから、女性にとってセクシーでないのでしょうね。

**蔦森**　「セクシーでない」という言い方には、「あんた、ぼくの恋人じゃないでしょ」と言ってやればいいんですよ（笑）。そうでなければ、あなたはこうだから魅力がない、とちゃんと理由を言えるはずだもの。その人にとってのエネルギーが無理なく出ていれば、その男の人はセクシーにみえるでしょうね。

男性が無理をするのは、男性は自分に愛を向けない、自分への誉めが足りないからです。自分自身を愛さないことは、自分の尊厳に対する冒涜で、過去の自分が可哀相ですよ。そういう人は、他人に対してもそうかもしれない。人間は、ああまたバカやっちゃったよ、と同じあやまちを繰り返すかもしれないよね。でも同じあやまちを繰り返し得る存在であることに気づき、それを許してやることが大切だと思う。それが自分への「癒し」だと。自分に対する許容度が深くなることは、人に対する許容度も深くなることにつながる。そうすれば、人との信頼関係も増えますよね。それは言い換えればモテることなわけです。そして、信頼関係は多い方が人は幸せです。

## ジェンダーの二項対立を超えて

**蔦森**　人間の可能性が広がる中で、現在は過渡期だから、女性に対する差別的な間口の狭さは社会にまだあるけれど、最終的に、人の差はジェンダーではなく、「気づいてしまった今生の目的」に還元されていくのではないかと思う。あとはやるかやらないか、選択の問題。だからこれからは、人を分けて区別するのは、男だ女だではなく「モード」、つまり選び取った男性的形式・女性的形式の問題になってくる。男は自分のモードのみにこだわってきた。私は一度、服装だけじゃなく、その男／女の垣根の前提条件を取り外し、一回視野を全部広げてみてから選び取る作業をしてはどうかと言っているわけです。

私自身、そうやって男／女の垣根を取り払って自分なりに選択していくうちに、自分の中の前提とされている「男」や「女」があらわになり、その度にどうしていいかわからなくて立ちどまった。そういうときに感じたのはカテゴリーの誘惑です。たとえば「ニューハーフ」とか「トランスセクシュアル」とかね。こういうネーミン

グを自分に与えると、ユニオンみたいで安心感はあるんですよ。けれど一方で、自分はそこにあてはまらないという違和感があって、そういう自分へのラベリングもやめました。それで、いろんなユニオンから攻撃されましたよ。女なのか男なのか、男なら、オカマなのかホモセクシュアルなのか、はたまた、ニューハーフなのかと。何処に所属するかが重要だという、ユニオンの落とし穴ですね。あるいはジェンダーという仕掛けだといってもいい。

でもね、女装もしてみたうえで、男／女を前提としたジェンダーを無効にしたら、何もないことが、この頃わかりはじめてきたの。二項対立の世界は、ことばを持つ人間の体系の宿命ではないか、やはりドゥルーズやガタリの言う「n個の性」は成立しないのではないか、とね。

「中性」的な天使も夢みられない、十八世紀の知識人のように、自殺か宗教か発狂かといったような三パターンもとれない。で、いまはどうしたものかなあと思っているんですが、私たちが使っていることばというものがここまで煮詰まってきてしまったら、もう次の段階に行くしかないんじゃないか、このことばの壁を超えるにはダイレクトに相手と共振するテレパシーやシンクロしかないんじゃないかと感じているんですよ。今は電波も波長の短い光になり、クルマもヒトの体もどんどん波長の短い流線型になってきていますから、ここまでくればことば無しで人と共振できる、と。

**諸橋**　私に、男性をやめるのになぜ反対項の女性にしかならないのか、という疑問がありましたけれど、現在のことばの世界では男と女の二項対立しかないと言われると、やはりそうだなあと思えてきます。男性でないとすれば女性でしかない、というジェンダーの罠は、我々人間の貧困さなのかもしれませんね。

**蔦森**　「共振」のトライはしているし、できることもあるんですよ。ただ、そうはいっても、ここで生きてこの道筋の上に乗りながら生きて行くしかないんだよね。私にとっての「宿題」は、やはり、この世界のことばを使い、それを使いきってゆくしかないと思うようになってきたんですがね。

しかし、私としては、男と女の間の往き来をするのでなく、現存の男／女を前提とした対極的な座標軸そのものを超えたいと考えています。

# 家庭科――遊ゆう・惑わく

## ～強姦を考える～

●大阪府立茨木高等学校●
小林由佳・浅井由利子

小林由佳

討論の時間を多くとった授業をしてみて、生徒たちの中には、自分の意見を皆に聞いてもらいたいと感じ、もっと多く討論する時間がほしいと、私に申し出てくる生徒も出てきた。実際、生徒同士で活発に意見を交わす姿は生き生きして見えた。また、それぞれの価値観によって異なる意見を聞くのは、私にとっても刺激的だった。

とは言いつつも、私は売買春の授業を終えたとき、ほっとした。正直なところ、短い時間ではあったが、毎時間どれほど緊張して授業に臨んだかしれなかった。この授業は、単に知識を注入していくものではなかった。そこがたとえば栄養素に関する授業の時とわけが違った。栄養素の授業では、たとえ反論されたとしても「それは違う、これが正しい」と、はっきり言えた。しかし、売買春、性意識に関する問いに対しては、答えは一つではない。もしも、それぞれの意見の中に、私と全然違う、とても鋭い視点から見たものがあり、私の考え方を批判されたらどうしよう、私は自分の考え方を相手にわかるように説明できるだろうかと、不安でたまらなかった。

いつも、授業の進め方は、浅井さんと長時間話し合って決めた。話し合っているうちに、ああそうか、私は本当はこう考えていたんだ、と自覚したことが多々あった。そんな余裕のない私は、生徒の様々な意見をどこまで認めることができるだろうか。お互い、自分とは違う意見

を認めあうことの大切さは、理屈の上では十分すぎるほどわかっていたつもりだ。

今までは、いつもきれいごとだけを言って、私の中の加害性から目をそらしてきた。「～はいけません。だからこんなふうにしたいですね」といったように。でも今回は、授業を進めていくうちに、まずは、ありのままの自分と向い合わなければ始まらないと考えるようになった。そのため私は、常に、具体的な私の意見をはっきり述べるようにしてみた。生徒たちには、私の意見は一個人として受け止めてほしいと何度も言った。

自分をさらけだすことは私にとって勇気のいることだった。途中で何度も辛くなったり、自分の言いたいことがうまく伝わらずイライラしたりした。

結局、私はまだまだ教師という立場に縛られているのかもしれないと思った。「教える」ことは、教師から生徒への一方通行で、教師は常に生徒の模範でなければならない、みたいなイメージが残っているから、緊張したり不安だったのかもしれない。

授業の中での私の意見を主張するやり方は、はたして、生徒の目にはどう写ったのだろう。また、どこまで売買春について考えることができたのだろう。授業後のレポートは、期待と不安が入り交じった気持ちで読んだ。以下は生徒の感想である。

◇先生がズバリ自分の本音を言ってくれるのがよかった。

◇最初は、自分とはまったく無関係だと思っていた。でも売買春は男女間の関係を象徴している。ならば自分もいつかは直面する問題に違いないと考えるようになった。

◇売買春を考えていくうえで、私はいままで自己中心に生きてきて、周りから「きつい」「つめたい」とよく言われてきたがその理由がわかるような気がした。他人の不幸はその人の努力が足りないだけなのだと思っていた。

◇以前は笑えた深夜放送の下ネタに今は笑えなくなった。

身近なところから、性の問題を考えるきっかけにもなったようである。また、「セックス」や「レイプ」など、最初は口に出すのも恥ずかしがっていたのが、レポートの中ではストレートに「強要されるセックスは嫌だ」等、自分の性意識についてはっきり述べており、その変化をうれしく思った。

しかし、喜んでばかりもいられなかった。私の予想以上に批判が沢山あり、ショックを受けた。

◇先生は自分の意見を言い過ぎ。押し付けられているような気がした。

◇班に分かれて討論し、私たちが考えようとしているときに先に意見を言われると、皆が先生の考えに流されていったように感じた。もっと中立的な立場から授業を進めて欲しかった。

この意見はもっともだなと反省した。ただいつでも自分の意見を言えばよいのではなくて、言うタイミングも大切なのだと感じた。

しかし、この中の「中立的な立場」の意味がよく理解できなかった。「私たちが考えようとしている時に、先入観を与えないで考える余地を与えて欲しい」という意味で、すべての授業において「中立的な立場」をとってほしかったのか、それとも、討論の時だけだったのか、今となってはそれを確かめることができないが、自分の意見を主張するやり方と、主張しないやり方とどちらがいいのか、今後の課題にしたい。

生徒たちの中には、いままで常識と思ってきたことを覆されることの不快感を覚える人も少なくなかった。

◇用意された資料は作意的な感じがした。なぜなら、女性ばかりの意見だもの。男性側の意見も聞かねば。

◇この資料が正しいという保障はない。先生こそ情報に操作されているのではないか。

また、「先生にもまだすっきりしない、まよっているところがあるのではないですか」とも指摘された。

さすがに、これらを読んだときには非常に腹がたった。「これほど一生懸命やったのに、人の気もしらないで」と、一時は、レポートを見る気にもならなかったほどだ。でもやっぱり気になる。しばらく時間をおいてから、もう一度見直すことにした。冷静になって読んでみると、あたっているところもある。あんなに腹がたったのも、実はみすかされたことを認めたくなかったからだったのだと自己分析した。

私自身が成長するためにも、この批判の数々と向きあおうと思っているが、これがなかなか難しい。そして同時に、ああ、こうして授業は生徒と一緒に創っていくものなのかなあと感じた。常に生徒の反応を見ながら、生徒と共に教師も大きくなれたらいいなあと思った。

授業を通じて、私もたくさんのことを学んだ。家制度や性別役割分業に縛られた自分の性意識を自覚し、社会

における女性差別を新たに感じながら、ますますわからなくなったことがある。それは、「対等な関係」とは一体何なのか、ということである。

私は、対等な関係とは、男女がお互いの生き方を認め合い、それぞれが自分らしい人生を過ごしていくことだと、漠然と思っていた。そして、その関係は、私たち女性が男性に性の不平等に気づかせ、自分の望む関係を要求していけば、時間はかかるだろうが男も変わっていき、対等な関係がつくれるのではないかと考えていた。よく生徒から、「こんなこと、女ばかりで話していても仕方ない」と言われたが、女子だけの授業は不合理ではあるが、女だけで自分たちがどんな関係を望むか考えることは決して無意味なことではない、と話していた。

対等な関係をつくるためには、まず性の不平等を認識しなくては始まらない。それは、気づかずに日々の生活を過ごしていけるほど社会の中に浸透しきってしまっているが、いったん気づくといろいろなことが目につくようになると思う。

生徒にとっても、この授業がきっかけになればいいなあと考えている。そして、男女が共に生きることについて、生徒と一緒に考えていきたい。

浅井由利子

「私は友人が売春していても悪いことだとは思わないし、自分も必要があれば売春することに、あまり抵抗は感じない。例えば『時給七百円』のハンバーガーショップでアルバイトするのも、『一度のデートで五万円』といって中年のおじさん相手に売春するのも、正当な稼ぎだと思う」

これは、売買春についてのアンケート結果に対するある生徒の感想である。読んだ時からずっと心にひっかかっている。「売春はいけないことだ」ということを教えようと思ってこのテーマを選んだのではないが、こうはっきりと「売春を悪いことだとは思わない、正当な稼ぎだ」と言われると、一瞬、驚き、次に、彼女の意図は何だろうと考えた。本当にそう思っているのか、それとも、私の授業に対する反発なのか。

以前、寺島紘子さんの授業実践（『新しい家庭科Ｗｅ』'91・10）で「『強姦』や『売買春』の問題をとり上げる時、日常の男女のあり方に強姦のひな型があり、売買春をうみ出す構造があるということをおさえないと生徒は

『気の毒な人』の問題として片づけてしまう」という部分を読み、なるほど、と思った。しかし、それをおさえるためには、どんな資料を用意し、どんな授業をしたらよいのか、小林さんと二人でずいぶん悩んだ。売買春や強姦について、アンケートやグループ討論、資料による説明の後、日常の男女のあり方に目を向けて欲しいと思い、まとめとして、角田由紀子さんの「主体的に『性』を生きるために」（『新しい家庭科Ｗｅ』'91・10）とフィリピンのリサ・ゴーさんの「日本の女性たちへ」（『アジアと女性解放』アジアと女たちの会会報No20・'89）を抜粋して、プリントにして配り授業中に読んだ。その後、どちらかひとつを選び、感想を書いてもらった。

まず、角田さんの文の感想から、

Ａ　主体的に「性」を生きるというのは、まだ夫婦になっていないので、実感は全然わかない。でも、ドラマでも、たいてい誘うのは男だし、女が誘うと「おっ」と思ってしまう。きっと、私も自分からは誘わないだろうなあと思っていた。私は、男の人が求めたら応じるのがふつうで、それをレイプとするのには最初すごくびっくりした。でも、そういう構図がふつうになってしまっている現在、それを変えてゆけるのだろうか。

Ｂ　売買春は、特定の少数の常識のない人たちがこっそりやっていることだとずっと思っていた。多くの男性が買春をしたことがあるときいたとき、まず、父を疑った。父も買春をしたことがあるのだろうか。父が出張したとき、何か不安だった。けど、父に買春したことがあるかどうかなんて絶対聞けない。このあいだ、父が社員旅行があると言った時も、いかないでほしいと思った。母はこういう売春の実態を知っているのだろうか。

Ａは、とても活発で、一年生の頃から、女だからということで自分の夢をあきらめたくない、仕事も、結婚して子育てすることも両方やりたいと言っていた生徒だが、性については消極的であるべきだと思っていたと言う。

Ｂは「七割の妻はしたくないのにセックスをしており、そのセックスもほとんど夫の誘いかけによる夫主導型のもの」で、「妻がしたくなくてもセックスを求める夫たちは、またかなりの高率で買春体験者である。夫の四十八％が婚外性体験があると答え、その六十八％が買春体験者である」というのを読み、かなりショックを受けた

ようだ。

私は、リサ・ゴーさんの「日本に来ている第三世界からの女性たちは日本の女性たちが背負い込みたくない重荷を代わりに背負ってくれている人達ではないか」「社会がそれを必要とする限り、その売春という仕事は、いつも最貧困の女性たちが、家族を養うため、お金を儲けるためだけの仕事として、社会に存在する」「日本の女性たちが本当の解放をするなら、どうか他の人達に自分の重荷を押し付けないで、自分達の解放をしていただきたい」というのを読み、胸にぐさっと突きささり深く考えさせられた。生徒はどう感じたのだろうか。

C　私ははじめ読んだとき、はっきり言ってむかついた。この人は、日本人ばかりを悪く言っている。日本の女性は、売春を他のアジアの国の女性たちに押しつけているにすぎないなど、よくも言えたもんだなと思った。

D　日本の女性が悪いんじゃなくて、日本で売春婦が不足しているのに目をつけ、組織ぐるみで売春婦を送りこんで利益を得ている人が悪いと思う。また、東南アジアの女性だって、日本に行く方が、今の生活よりはましという思いがあるのだろうと思う。だから、東南アジア諸国の社会が住みよい社会になったら、日本にまで出稼ぎに来る必要もないだろう。だから、一方的に日本の女性の重荷を第三世界の女性が背負っているといわれても納得できない。

E　男性が、自分たちさえよければいいという考えで女性を服従させているように、私たち日本女性も、自分たちが嫌な目にあっていなければ、女性の権利は守られていると考えているところがあると思う。本当の女性の人権保障は、社会の中で差別されている女性とかその役割とかがないことだと思った。自分も加害者と思うと、なんかしんどくなってしまった。これって、男の人の心理かもしれませんね。自分の優位をわざわざ平等にかえるというのはしんどいんだと思った。

**・授業を終えて**

わずか四～五時間の授業だったが、私にとって印象に残る授業だった。授業で生徒と一緒に考えていくことができ、今まで見えなかったものが少し見えてきて、このテーマから発展して、さらにじっくり考えたいテーマが出てきたからだ。

生徒と同様に、私も初めは、強姦や売買春を自分の問

題として捉えにくかった。しかし、授業をすすめていくうちに、〝結婚〟と〝売買春〟とでは、どこが違うのだろう。どちらも女性の「性」を取り引きする点では同じではないかと考えるようになった。また、今までの強姦のイメージではなく、強姦を「人が同意するか拒否するかを自由に選択することができない、いわゆる強制された性交である」と新しく定義しなおしてみると、夫婦の間に、強姦や強姦に近い形はかなりあることに気づき、日常の男女のあり方を変えていかない限り、強姦や売買春をなくすことはできないと思うようになった。　強姦や売買春を授業にテーマに選んだのは、被害にあわないよう気をつけましょうとか、売買春をしないように気をつけましょうということを伝えたいと思ったのではなく、このテーマから、男女の対等な関係とはどういう関係かということを考えたいと思ったからだ。しかし、今回の授業では、プリント教材が多く、頭の中で考えることが多くなってしまった。

　たとえば、アジアからの出稼ぎ女性についてのスライドやビデオ、あるいは男性側がどう考えているか、男子の意見を聞く機会をつくる等、違ったアプローチが必要だったように思う。さらに、いろいろな事実を知った上で、これからどうするべきか、自分たちに何ができるのかを討論する時間をとった方が良かったのかもしれない。そうすれば、「男女の対等の関係」と「売買春や強姦の問題」とを結びつけて考えることができたのではないか。

　ある生徒が「もし自分に女の子どもができた時に『なぜ、女の方が気をつけなければならないのか』と思いつつも『気をつけなさい』と言うだろう。どうすれば社会が変化できるのか、これは、私が初めからずっと考えてきていた疑問で、答えが見つからない」とレポートに書いており、やはり、時間不足で、最後にモヤモヤしたものが残ってしまったのかなあと思った。私の方が、まだまだ、問題の本質がきちんとみえていなかったせいかもしれない。しかし、彼女が、そのモヤモヤにこだわることで、いつか、答えを自分自身で見つけてくれるのかもしれないとも思う。授業の中で、正解をひとつ示すということはできないし、また、そのようにまとめなくてもよいと思っている。

　前任校に比べて、今の学校の生徒たちは、文章力があり、確かに、私がラクをしている面があると思う。しか

し、実は、性を授業でとり上げることについてはかなり抵抗を示し、自分には関係ないことだという意識が非常に強かった。「性」にかぎらず、受験に関係のない家庭科の授業を成立させるには、相当のエネルギーがいる。最初に生徒をひきつけることができなければ、おとなしく座ってはいても、数学や英語の「内職」の時間になってしまう。それに、受験勉強に追われ、マニュアルを求めている生徒にとっては、答えがひとつに決まっていない家庭科はやりにくいし、考えることは面倒だということらしい。

グループ討論の時間をとっても、雑談や内職。一応、話し合っていても、うまくアドバイスしなければ、なかなか、考えを深めていくようなものにはならない。私はそんな様子を見ていて、こんなことなら、私が講義したほうが能率的ではないか、時間がもったいないと、つい思ってしまう。しかし、生徒の感想に「私たちは討論のしかたが下手で、先生はイライラするかも知れないけど、やっぱり、生徒同士討論する時間をできるだけ多くとってほしい」といったものがずいぶんあり、「授業が終わってからも、ストーブのまわりに集まって、すごい盛り上がってん」というのを聞くと、うまくいかないからやめておこうというのではなく、討論する時間を大切にしたいと思う。また、実験・実習か講義かという従来の授業の形態ではない、もっと違ったスタイルの授業を考えていきたいと思っている。

今回の授業では、建前でなく、かなり本音を出し合えたと思う。それは、生徒の発言やレポートからそう思ったというより、むしろ、言葉以外の雰囲気から、そう感じられた。それは、生徒と私が一年あるいは二年間のつきあいがあり、気心が知れているということや、私も構えないでありのままの自分でいられたということも関係があるかもしれない。

また、難しいテーマに取り組めたのは、生徒の様々な問いかけに対して、私一人で考え込むのではなく、ああでもないこうでもないと、まとまらない話を聞いてくれる相手、小林さんがいてくれたおかげである。

授業を終えた今、性別役割分業のないカップル、同性愛者についてや子供への性的虐待について関心をもっている。今後、さらにこのテーマを深められたらいいなと思っている。

# オホーツクの潮風荒く…

## 番外編その3

「コンドームをつけてといえるようになってね」

江口凡太郎

**最後のテーマは「避妊」**

生徒の興味をひく内容、教授方法を探りながら二学期がすぎ、あっと言う間に三学期、最後のテーマに「避妊」を選びました。昨年見学させてもらった片山富美子さんの「コンドームをつけてといえる女になろう」の実践をもとに授業しました。

初めに、望まない妊娠の事例をプリントし読み合わせ、避妊法の説明を一通りして、ピル解禁やＡＩＤＳ問題にも少しふれました。次に、市販のコンドームと避妊フィルムの広告を数種類見せて、そこにあるキャッチ・コピーから、避妊の主体者は、責任は?といったことを考えさせました。よく使う手のビデオは、「保健」や「保育」などで見せているので、ここでは使いませんでした。

☆「男の先生なのに、女の子ばかりのクラスでＳＥＸについてやひにんについてなどいっしょうけんめいやっていたぼん先生の取り組みがいんしょうてきでした」

☆「先生の避妊法は何?って聞いたら、顔がちょっとずつ赤くなっていったことが印象に残った」

☆「ピルは自分自身の体を傷つけているような気がする」

☆「男の人に『コンドームをつけて』と言える人になりたい」

☆「『コンドームをつけて』と言えるような関係をつくり、かなしい妊娠をまちがってもしてはいけないコトだと思いました」

☆「彼氏に『今さらこんな事教えてくれるさ』とは言ったけれど、避妊は欠かさず実行しようとあらためて思った」

☆「もっと詳しく勉強したかった。ビデオとかとりいれてやりたかったし、ピル、コンドームなど実物など見て知っておきたかった」

☆「おとこの子への教育もひつようである。好きなこがひに

んしてといったとき自分の行動は、など男の子のきょうみをあつめるもので性について学習させるべき」

☆「男性も授業のように勉強してもらえば、おろすとかもめるというようなことはないと思うので男も協力してほしいと思います」

私のねらいや、授業後の反省点は、ほぼ感想の言葉にある通りです。さらに、私が問題と感じながら、ふれることができなかった男女共学に絡む点が、前述のように生徒から出てきたのはとてもうれしいことでした。

しかし、

☆「つまらない」

☆「私には関係ないし、そんなのどーでもいー」

最後まで、寝ていた子、編み物、マンガ、私語…などは続きました。いつもより多少ましでしたが、気合いを入れて取り組んだ「避妊」も全体をつかめないまま、いつものように最後の授業も終わりました。

**最後の最後は**

最後の授業、終了の鐘がなり、いつもはきまりの「礼」も雑然とするのですが、なぜかシーンとしました。そこで、最後に私が言った一言は、

「『コンドームをつけて』と言えるようになってね！」

すると、全員で「はい」とそろって返事が起こりました。青春ドラマのようにタイミング良くそろっていて、言った当人達も驚いていました。

教室を出る私に誰ともなく「ほーたるのひーかーりー」と歌が出たときは、はずかしながら、最終回の金八先生に自分がなったような気分で感動してしまいました。

三回に分けて、生徒の感想を中心に昨年の授業を振り返ってきました。苦労したこと、学んだこと、嬉しかったこと、いずれも多い一年間でした。私は、これを今後のパワーにする事を誓い、卒業してそれぞれの職場や学校でがんばっている彼女達の幸運を祈りたいと思います。

**最後に一言…**

☆「初めて教師になってうけもったクラスがこんなでつらかったでしょう？ぼんちゃんにとったらいいけいけん、さいしょはやっぱしもまれなきゃＢｉｇなティーチャーにはなれないからね」

●●●●●●●1989.3

○文部省新学習指導要領告示○

## 学校五日制導入の方向が打ち出される

**家庭科について**

すべての生徒に以下の三科目の中から一科目を選択・履修させる（必履修科目—いずれも４単位が標準）

●家庭一般

●生活技術

●生活一般（附則：「やむを得ない場合」「当分の間」、２単位分を「体育」「家庭情報処理」など指定された科目に代替することができる）

**３単位以上のすべての必履修科目について**

単位の一部が削減できる（生徒の実態や専門教育などの特色を考慮し、特に必要な場合）

※家庭科は４単位なので、１単位が削減対象。

# ご存知ですか？

## —男女共修家庭科が各学校の時間割に入るまで（高校編）—

家庭科編集室

## 今後にむけて

### 家庭科教員は…

次の３点をしっかりふまえて論じよう

1. 目の前の生徒の実態から出発。
2. 生徒の近い将来だけではなく、遠い将来までも含めた人間らしいくらしを。
3. 共修４単位とは家庭科教員の願いが反映されたもの。「指導要領の押しつけ」として、「君が代」「日の丸」と同列には語れない。

### 市民は…

1. あっちこっちで家庭科が 受験体制のしわよせを受けそうだと発言。
2. 学校の中で（学級懇談会 など）共修４単位の応援発言を。
3. 家庭科の教師に直接、エールを送る。

**1993.1学期までに** ◈ ◈ **NOW** ◈ ◈ **1992.前半**

各高校ごとに、職員会議で教員たちによって教育課程が決められる。

**1994.4**

各学校で、この年入学の一年生より男女共修。

4単位?!

もっとたっぷり感じ、ゆっくり考える時を生徒たちに!! だから少なくとも4単位の家庭科をどの学校にも!!

'94からの学校五日制導入の具体化の見通しが不明確。公立高校離れへの対策（コース制、単位制などの高校の多様化・入試制度変更＝装い新たな輪切りランキングへの道）

○各県などの教育庁は、「教育課程編成基準」作成○

**東京**

週の標準時間は32時間とする（現在34時間）

**家庭科について**

●施設・設備の整備や担当教員の確保など「生活一般」4単位履修が困難である場合、他の指定された教科目で代替可。

（しかし、現在 施設、設備のない学校は年次計画で整備の予定であるため、原則として都立高校では、附則はあてはまらず、家庭科は原則として4単位（口頭指示））

●単位の一部削減の科目ではない。（専門教育を主とする学校を除く）

**大阪**

●「生活一般」の附則は適用しないこと

●単位の一部削減は原則として行わないこと。

★★こんな声が出てくるのです★★

「私立男子校は、家庭科ナンカおかないヨ」

「進学校の看板、外すんか？」

「何としても良い生徒を集めるためには、進学に有利だと親や生徒に示さねば…」

「家庭科が4単位だと地域は進学校と見てくれないヨ」

## かんじんかなめの生徒たちは

塾・部活で夏休みも実質1週間ほどという超過労児。だから日常のくらしは素通り。豊かなくらしの文化を感じ、くみとるたたずみの時すら持ち得ず、マニュアルさえあれば安心顔。

# 「ゴミ」とつきあう

香嶋正忠

私は、まことに見通しの悪い人間で、我が家から一キロの所に市のゴミ工場が建設される話があったときも、後であんなに大騒動になろうとは思いませんでした。公害意識も乏しかった私は、行政が町の真ん中に建てるのだから、無公害に違いない、よい機械ができたものだ、人間は長生きしなくてはいけないなと家内と話していました。

ところが自治会長になって、行政と話し合ってみると、話が違って来ました。現在、窒素酸化物を除去する装置は、外国でも、まだ開発されていないというのです。おやおやと思いました。考えてみると団地のど真ん中だし、一番低いところはどうもよくない。ゴミ工場は便所と一緒で、なくてはならないが、立地がよくないということで立地を考え直して欲しいと、幾度も市と交渉しました。昭和五十年当初、市も強引で譲ろうとはしませんでした。座り込みにまで発展しましたが、あの広大な土地に二百人や三百人のお母さん方が出ても、どうなるものでもありませんでした。

ついに工場は昭和五十四年にできてしまいました。いったん建物ができると、裁判してもなかなか壊す事が難しいのは、これまでの例でよくわかっています。

そこで、いかにすれば公害が少なくなるかということへ、方向転換せざるを得ませんでした。みんなでいろいろ勉強し、プラスチックゴミが元凶だということがわかりました。これを燃やさないで、荒ゴミとして埋め立てて、もらおうということになり、まず自治会でプラスチックを生ゴミとして出さない運動をしました。昭和五十八年来、プラスチックゴミを燃やすとダイオキシンが発生すると新聞に大きく報道されて、私たちの運動が間違ってなかったことが、立証されました。

最近急にゴミが増え、大きな社会問題になってきました。ゴミ問題は、行政と市民と業者が協力し合わないと

解決しません。そこで、ゴミ問題を広く訴えようと、一昨年、神戸ごみ問題連絡協議会を発足させました。目的はゴミの減量やリサイクル、また市民の要望を行政に伝えるパイプ役になることです。

毎月第三火曜日の十時から、神戸の地下鉄名谷駅前の兵庫銀行二階で勉強会をしています。

会として最初の仕事は、家庭生ゴミを減らすと同時に、堆肥を使って、自分で無農薬野菜を作ろうということでした。コンポスト化容器を買うための、補助を求める市への陳情が認められて、三千円の補助金が五千個分付きました。好評で六千個売れ、今年も継続しています。

しかし、この容器の欠点は庭が要ることで、ベランダでは無理です。そこでペンキやさんが処分に困っている十八リットル缶をもらい、それで堆肥が作れないか実験しました。ところがちゃんとできました。何でも初めからだめと決めてかかるのはよくないことだと思いました。

そこに土を三センチほど入れ、生ゴミをよく水切りして入れたら、よく乾いた土を、ゴミがかくれるほど入れます。一週間ほどしたら、シャベルでよく空気を入れます。一日五百グラムとして二十日分くらい入り、あと二十日くらいすると、できると思います。これならベランダでできます。

我が家では新聞や段ボールは資源回収に出すし、生ゴミは堆肥の資源として使うので、プラスチック類しかゴミは出ません。

皆さんも堆肥を使って、サニーレタスやニラなど植えてもらいたいと思います。

また、「やっかいなゴミプラスチック」という話を、幼稚園や小学校のお母さんにさせていただいています。塩ビのイチゴパックから塩酸を作る実験をして、大理石がブクブクと溶けると、お母さん方には理屈でなしにわっていただけるようです。

もうひとつの実験は、ストッキングを燃やすと、青酸ガスが出るというので、そのガスで蠅が死ぬかどうかというもので、現在苦労して蠅をつかまえて、飼育中です。丸虫は二分間で死ぬので、蠅も絶対死ぬに違いないと思っています。

# ゴミと地域デザイン

## うあきつと集れ特汚

諫山陽太郎

「6月号は時間切れで失礼しました。それでは『地域主義』からお願いします」

「そうですね、たとえばゴミ問題で言えば、ゴミ問題を単なる技術の問題、あるいは心がけの問題にしないってことですね。どんな地域に自分は住みたいのか、どんな地域をデザインするのか、それを発想の基礎に置くということです。資源回収型の分別収拾をやらない地域でどれだけ分別を『心がけ』たってしょうがないでしょう」

「マナーの問題という視点から脱却するということ？」

「似ているようで違いますね。強いて言えば『マナーの組織化』の問題です。たとえばどれだけマナーのいい住民ばっかりが住む地域でも、資源回収型の分別収拾をやらなければゴミは減らない。逆に、細かく細かく分別収拾しても、出す側のマナーが悪ければほとんど意味がない。自治体と住民の双方でどれだけマナーを組織するか、組織できるか、それがぼくのいう地域主義、『地域デザイン』の問題なんです」

「地域、つまり自治体と住民とで、どうゴミとつきあうか、そういう問題なわけね」

「平たく言えばそうですね。それから、ここまで安易に『住民』という言葉を使ってきたけど、ぼくはこの『住民』という言葉と『市民』という言葉とは分けて使いたいんですね。簡単に図式化すれば、住民＋ヨソモノ＝市民、というところかな」

「あなたのいう『住民』はよく言われてる旧住民ね。それで『市民』には新住民も含むと、そういうわけね」

「ゴミ問題を取材してて、ほんと、あちこちで聞いたもんね。ここらは新住民やからマナーが悪いとか、共稼ぎが多いからマナーが悪いとか、そういうことを平気で口にする自治体のゴミ担当者がいるからね。彼らにはね、結局『住民』しか見えてないよね。新しいライフスタイルを持った『市民』なんか、彼らの目にはヨソモノとし

か見えてない」
「ちょっとちょっと、話も見えなくなっちゃった。それで地域デザインは？」
「そうそう、だから地域デザインは『住民』を基礎に置いてはいけないということ。そりゃ『住民』を当てにできれば分別収拾も簡単ですよ。地域の自治会長とかを集めていついつから分別収拾をやりますって説明して上意下達、地域の指令部は定年後の男性たち、実働は家庭の主婦、そういうこれまでの隣組みたいなシステムをフル活用すればね。でも、そういうシステムだと、どうしても『ヨソモノ』が排除されてしまう。というより、ヨソモノを排除したところでしかそんなシステムは成り立たないよね」
「だから地域デザインも、ヨソモノを含めた『市民』を基礎に置け、ということね」
「もう一歩進んで、ヨソモノを基礎に置け、ということですね。地域のヨソモノ、一例でいえば働く独身男性が個人として参加できるような地域ですよ。『ここらは共稼ぎが多いから』なんてよく言うよね。それも、回収車が来るのが大体朝の9時位、そのあとでゴミステーションのあたりを掃除しなければならないんだけど、こんなシステム、働いてる独身男性の誰が参加できる？」
「自治体としては、男が働いてて、女が内にいるという家を基礎として考えているわけね」
「そう。これも『家族主義』の悪しき実例だよね。個人が個人として地域に関わるんじゃなくて、家が地域に関わっていくという形だもんね。ゴミの問題も個人の問題と言うよりは家庭のそれも主婦の問題みたいになってしまってる。家族主義はここにも根を張ってる」
「働いてる独身男性が地域に関われないというのはほんとにそうだと思う。労働条件が悪すぎるものね。それもそんなに働いて作ってるものだって、何年かのうちにはゴミになるものよね。そんなのを働き盛りの男達が職場で一生懸命作り、定年後の男と家庭の主婦が地域で処理するはめになる。どこかでこの悪循環を止めないと」
「止めることはできないと思うけど、もっとましな循環に変えていかないとね。そのためにも、地域デザインという視点、どう地域に住まうのかという視点はあったほうがいいと思う。え？　もう時間？　じゃあまたね」

# 石けんシャンプーの美容室を開いて

木浦妙子

現在大学一年になる長男を出産したとき、毎日のオムツ洗いで、指紋がなくなり、ヒビ割れし、毎夜指に包帯を巻いて寝る生活でした。しかし、それは私の体質、皮膚が弱いのだと思っていました。白さイコール清潔と信じ、オムツ洗剤に浸けて洗っていました。

産休が明けて仕事に戻った時、それは合成洗剤のせいだ、粉石けんを使うとよいと勧められ、粉石けんに切り替えて約一か月程で、手荒れも治り指紋も出てきました。私は自分の生活を見直し、まず我が家から全ての合成洗剤をなくしました。もちろん化粧もやめました。

けれども、いくら家庭で合成洗剤を追放していても、一、二か月に一度は行く美容室で、合成のシャンプーで洗われ、そのあと、やたらとベタベタ髪につけられ、リンスだってきれいに流してくれず、ムズムズする頭を家で洗い流すことも多かったのです。友人の美容室へ何度かカリ石けんを持って行き、使ってくれるよう頼んでみましたが、営業としては使えないと言われました。

しかし、どうしても、石けんで洗う美容室が欲しいと思い、「では、私が…」と、昔取った免許の埃をはたいたわけです。自分で店を開くとなると大変。東京の美容室「パーマイン美貴」へお便りを出し、尋ねて行きました。また、合成洗剤追放運動で活躍されている三重大学の坂下栄先生をお尋ねし、相談にのっていただくなどして準備を重ね、一九八九年三月、皆さんの暖かい支えのもとでオープンしました。

石けんで洗ってみて弱ったことは、今まで合成洗剤で洗い、ブローをし毛染めをしたりで髪が大変痛んでいる人、また、細い髪で傷みやすい人、髪を洗うともつれてしまう人などの髪を洗った時、洗い上がりが悪く、油脂分がとりきれずベタッとした感じが残り、ブラシを入れると真白い石けんカスがブラシにつき、サラッとしない

のです。訳を言ってシャンプー台に戻ってもらい、もう一度ていねいにゆすぎ、また乾かし、何とかセーフ。冷や汗をかいた事も何度かありました。ゆすぎが足りなかったのでしょうか。まあ半年程でそれもなくなりました。

喜ばれたことは沢山あります。まず、皆さんが言われるのは、洗髪後、頭皮がかゆくない。抜毛が少なくなった。髪にコシができた。産毛がはえてきたなど。

私も最初、合成シャンプーで洗っている人、石けんで洗っている人の違いは、香りと、シャンプー台で流した時の泡でわかる程度でしたが、一年過ぎた頃から、お客さんの髪が変わってきたのが分かりました。シャンプーの時、手の甲に当たる感じが違うのです。まるいというか、当たりがなめらかでしなやかなんです。ご本人も何かしっとりしてきた、人にほめられる、と言われます。

オープンした時、七十歳の女の方が、私に頭を預けるとおっしゃいました。この方は本当に前頭部が薄く、全体にコシのない髪で、シャンプーすると抜けた毛がからみ、硬く結び目ができ、切らなければならなかったのですが、一年程で額の禿げていた部分に産毛が生えて来ました。洗ってももつれないし、一本一本にコシができ、つやもでて、密に生えてきました。三十代前半の男性の頭頂部のうすい部分が、一年間で分からなくなりました。彼は出張の時も、しっかり石けんシャンプーと専用のリンスを持ち歩いたということでした。石けんシャンプーを使うことによって髪がはねなくなったとか、ブローが楽になったといってくれる人も多くなりました。石けんシャンプーから粉石けん、固形石けんと切り替えたお母さんが、子どものアトピーが治ったと喜んでくださったり、シャンプーだけでなく全ての合成洗剤から石けんへと切り替えてくださる方が増えて来ました。　しかし、石けんは薬ではありません。石けんで治ったのではなく、石けんを使うことで健康な皮膚に戻ったということだと思います。長い間かかって痛めた髪や皮膚は長い間かかって治すということが大切です。一度洗いでダメだったら二度、三度洗ってみる。ブラシを使って洗う、リンス（中和）をゆっくりしてみる等、自分に合った洗い方をしてみるということが大切です。

石けんシャンプーの店　「天の半分」
長崎市中川1-6-4　馬場ビル　1F
☎095-823-1525

特集 汚れとつきあう

# 「清潔志向」を見直す

小松友子

家庭雑廃水のうちでも米の研ぎ汁やみそ汁といったものが、思っていた以上に河川を汚すという事を耳にしてから、極力流さないように、みそ汁は残さない、米の研ぎ汁は鉢物の植物にやるという事を心がけて何年にもなる。しかし、一家五人分の研ぎ汁は、冬場や雨の日が続くと、庭のない団地住まいではどうしても持てあましてしまうことになる。バケツやじょうろに取って置いた研ぎ汁は、冬でも、丸一日経つ頃には臭いが立ってくる。だんだん暖かくなるにつれ、発酵の速度は増し、ものの数時間で鼻につく臭気が漂うことになる。これを子どもたちは嫌い、「くさい、くさい」と大いに不平を鳴らすのだが、こうした場面でふと思うのは、「生活とエコロジー」という事についてだ。

もう十八年にもなるが、結婚して間もない頃、夫の生家で朝食の片付けをしていた時のこと。私が茶碗などを洗っている様子を目にとめて姑が言った。「文子さん、朝はそんなに油っこい物がないから洗剤なんかつけなくていいからね」「はぁ」と答えつつも、私は訝し気な色を出してしまったのだろう。義母は続けて言った。「鯉に悪いからね。油物食べた時でも洗剤はなるべくほんの少し、間に合う程度に使ってくれればいいから」

そう言われても、初めの頃は、義母の目を盗む様にして、義母が近くにいないときはたっぷり洗剤をつけて洗っていたのだが、すぐに知れるところとなった。それもそのはず、私が洗い物をした時は、縁側のすぐ側の小さな池に、白い泡が沢山浮いてしまっていたのだから。

雪国にある田舎の家の裏庭には、大小二つの池があって沢山の鯉が泳いでいる。大きいほうは鯉が冬越しをする為少し深くなっており、小さいほうは餌をもらいに来たり、遊んだりしている池で、家庭排水もここに流れ込む。自分たちのくらし方が「鯉」という「生きもの」に直結して見える事で、「鯉」に気を配ったくらし、「洗

剤は極力おさえる」というくらしの中では、水を汚しても環境破壊までは繋がらない。

振り返って都会に住む自分たちのくらしを見てみると、流し台の排水口から先は一切見えない。どんなに汚い物を流しても、流し台から消えてしまえば、その先へ想像を馳せることはほとんどないといっていい。河川や海の汚れと言われても、都会では堰も小川も地下にもぐり、海へも遠いと、実感として、自分のくらし方と直結していることが伝わって来ない。だから時々、米の研ぎ汁に代表されるように、ささやかながらもくらし方に気をつけようとあれこれやっていても、「この団地で一体何人がこうして気をつけていることだろう。ほとんど〝焼け石に水〟なんではないだろうか」と、自分のやっている事に対してさえ懐疑的になってしまうこともある。

人々は毎日たっぷり洗剤を使って食器を洗い、ちょっと袖を通しただけでも洗濯をし、せっせとシャンプーをする。そうしたくらしはいかにも清潔できれいで快適で、悪臭を放つという事からは遠いし、水の汚れという点でも「見えない」ということで遠い。

近頃地球規模の環境問題やエコロジーについての関心が高まり、また蚤やトンボを蘇らせようという運動も広まってきているが、こうした病的なまでの「清潔指向」を見直すことなく、ハエや蚊は毛嫌いするが、蚤やトンボは返ってきて欲しいと願う視点は、あまりに身勝手ではないだろうか。

田舎の老親のくらし方に照準を当てて、我がくらしを見た時「何で食器や鍋がピカピカでなきゃ駄目なの？」「何で白いものがいつまでも真っ白でなきゃ駄目なの？」「夏や、スポーツの後ならともかく、冬まで毎日洗濯する必要あるの？」「石けんか洗剤かという前に、まず洗いすぎなんじゃない？」「日本人の清潔感覚がもはや病的なんじゃない？」という疑問が浮かび上がってくる。

エコロジーを本気で考えるなら、「循環」という中でのくらし方を選ぶことに繋がっていくだろうし、そうしたくらし方には、不便さや不快さという事と併せて、歓迎しない臭いや生き物も当然出てくる。不便、不快、面倒といった一切とどこまで折り合いをつけたくらし方ができるかという事を不問にしては、エコロジーを論じたり、美しい自然環境を希むなどという事は絵空事でしかないと思えるのだが。

うあきつと集れ特汚

# 環境サミットから

相川康子

☆リオの街角で

常夏の国・ブラジル。リオデジャネイロ空港に降り立つと、これから冬に向かうというのに、ムッとした空気が体を包む。加えて強烈な排気ガスのにおい。「かなり大気汚染がひどいねえー」。同行した研究者や公害ぜんそく患者らがまゆをひそめた。

複雑に入り組んだ海岸線を持つリオは、コパカバーナやイパネマなどのリゾート海岸を持ち、小高いコルコバードの丘の上には有名なキリスト像が、来る者すべてを祝福するかのように両手を広げている。「病める地球を救う最後のチャンス」といわれる「環境と開発に関する国連会議（UNCED）」＝地球サミットと、それに平行して行われるNGO（非政府組織）の祭典「グローバル・フォーラム」のため、世界中から市民団体や報道関係者、政府要人らが続々とこの街に集まっていた。

各国要人が泊まっているホテルや幹線道路はもちろん、街中いたるところにライフルを構えた警察や軍隊が厳戒体制を敷いている。グローバル・フォーラム会場のフラメンゴ公園は、ふだんはストリート・チルドレンの溜まり場というが、ほとんど姿を見せない。どこかに収容されかなりの数が殺されたといううわさも流れた。真相は分からないが、この一大イベントが、リオの市民生活にかなりの影響を及ぼしていることは確かなようだ。フォーラムが始まる数日前には「環境保護の前に、もっと我々を大切にしろ」と訴える高齢者のデモがあったと聞く。

ホテルからフラメンゴ公園へ向かう道で、大きな立て看板が目を引いた。ポルトガル語でなく英語で書かれた、明らかによそ者に向かってのメッセージ。「エコロジスト、ゴー・ホーム」

☆UNCED会場で

会場となったリオセントロへは、市中心部から車で一時間。期間中は参加者を乗せた専用バスと一部タクシー

しか出入りできないようになっている。入り口でパスを見せ、厳重なボディーチェックを受けてから中へ。正装の政府代表に交じって、Tシャツ姿のNGOがちらほら。一部の会議だけとはいえ、NGOのオブザーバー参加を正式に認めたのが、今サミット最大の特長だ。開幕式でモーリス・ストロング事務局長が「ここに参列しているNGOの協力がなければ問題は解決できない」と高らかに宣言、NGO席から大きな拍手が起こった。

NGOの役目は、各国要人をつかまえて情報を聞き出したり意見を述べる「ロビー活動」をすること。といっても、ふだんまるで付き合いのない政府官僚に、どのようにアプローチしていいのか、皆目わからない。とりあえず、政府関係者の控え室になっている事務ブースに行ってみた。

プレハブに毛の生えたようなお粗末な各国ブースが並ぶ中で、日本のそれは開催国ブラジルに次いで大きく、クーラーも完備。いかにも「経済大国」を象徴しているかに見えた。関係者の控え室は到底入れる雰囲気ではない。出入り自由のロビーの大きな机の上には、英文で書かれた美しいカラー刷りの資料がズラリ。環境庁はもちろん外務省、郵政省など省庁や外郭団体の研究所が出した、日本の環境保全に関する広報物ばかり。国内でなかなか入手できない竹下元首相の「東京賢人会議レポート」まである。「まったく、どっち向いてPRしてるんだか…」と溜め息をつきながら、それでも〝参考のため〟資料一式いただいて帰ってきた。

☆グローバル・フォーラムで

フラメンゴ公園では三十五の大テントと五百を越える展示ブースが並び、連日シンポジウムやミニコンサートが開かれていた。あっちで宗教家ダライ・ラマが話しているかと思えば、こっちで歌手のシャーリー・マックレーンがしゃべり、別の場では未来学者レスター・ブラウンが講演しているという感じ。まじめな会議の最中、賑やかな民族音楽のパレードが乱入するなど「何が何だかよく分からん」場面もあったが、とにかく一万九千人ものNGOが一堂に集まる（なんと経団連もNGOだそうだ）パワーと層の厚さには目を見張るものがあった。

限られた時間の中で見ることができたイベントはごく一部だったが、「女性」と「環境教育」が今後のキーワードになるだろう、という手応えを感じた。日本よりも

ずっと男女差別が激しいアフリカやアジアの女性が「環境破壊の現状を知れば、女性はきっと立ち上がる。もっと教育の機会を」と熱弁していたのに胸が熱くなった。

日本のＮＧＯはと言えば、共同で三十番のテントを借り切り、派手にコイノボリや紙ふうせんを飾って折り鶴の講習会を開くなど、お祭り面での人気はＮＯ１。その一方で、第三世界の代表から「日系企業の公害輸出に対して、日本ＮＧＯは何をしてるんだ」と突き上げを食らったり、　リサイクルの例　として持ち込んだ牛乳パックの再生紙が見向きもされないといった側面も。「環境を破壊して成長した先進国のＮＧＯ」の立場の難しさを改めて実感した。

（ジャーナリスト）

**「奇妙な出来事アトピー」の上映会を開きませんか**

一九九一年夏完成。16ミリ、46分。アトピーの問題を本格的に取り上げたドキュメント。

兵庫県下、各地で上映会がありましたが、いずれにも参加できず、観た人の「よかったよ」という声を信じて、試写会もせず、冬のボーナスで購入しました。

私の勤める学校で延べ九回上映したのを皮切りに、「Ｗｅ兵庫の会」、明石で、「神戸アトピッ子の会」、「尼崎子どもの人権を考える会」、「長岡家庭科の共修と共学を考える会」、山形、愛媛と各地にフィルムがまわり、ネットワークが広がりつつあります。，92年Ｗｅ夏のフォーラムでも上映します。

食べもの環境、くらしを問い直す問題提起としていい映画だと思います。

あなたの地域グループでも上映会を開きませんか。

連絡先

〒６５５　神戸市垂水区狩口台４－２４－３０１

☎・ＦＡＸ　078-781-9427　西本和代

# はっけん

## 歩きながら暮らしの中で考える

兵庫　吉田明弘

アジアのことについて知ろうと思えば、僕はまず本屋に出かけます。何冊かの本を手にして帰ってきますが、でもすぐに読むことは少なくて、大半は本棚に顔をならべているばかりです。それなのに何かわかったような気分になってしまうのはどうしてでしょう。

また新聞を切り抜いてみたりもします。新聞には最新の情報や現実が載っていると、そう思い込んでいる節が僕にはありますから、時代を先取りしたかのように得意になってしまいます。ノートに記事を貼りつけた頃にはよく勉強したなと自己満足におちいります。

でもよく考えてみると何もわかっていないのが僕の現実です。新聞を毎日とり、ラジオを聞き、雑誌や本を読み、時たま講演会に出かけてみたりもする。けれどもそこにあるのは、誰かが調べたり、見てきたり、考えてきたりした情報や現実であって、それに僕の頭を合わせているに過ぎないのですね。

中村尚司さんの話は、そういう僕の思い上りに「現実から出発しようよ」と気づかせてくれるものでした。一方的なマスコミからの情報に振り回されるのではなくて、起きている現実について、自分なりのものの見方や、理解の仕方で触れてみる、それは僕の行き方と現実との対決に他ならないわけでしょう。そういう自分自身全体をカヤの外に置いた「まなび」のあり方に反省を求められたのでした。

日本にたくさん暮らしている外国の人たち。僕のすぐ隣にもそういう人たちが住んでいるはずなのに、そういう人と出会おうとしないで、本屋に走ってしまう僕。その滑稽さに気づかされました。

中村さんの本を読んでいたら「歩きながら考える」という見出しが目にとまりました。陽差しや風を感じない学びに慣れてしまった僕。「歩きながら暮らしの中で考える」。家庭科の教員をしている僕には、それがテーマになりそうです。さっそく子どもに話そうっと。

## クリーニングは今

兵庫　村上昌子

五月半ばのある日、閉店間際のクリーニ

ング取次店に立ち寄った。

ちょうど、季節の変わり目で、冬物の整理ということで、ドサッとクリーニング屋に持ち込まれたのだろうけれど、一体一シーズンに各家庭でどれくらいの衣類が洗濯されるのだろうか。冬物の季節が終わっても、〝汚れた〟と思えるだけ着たものしかクリーニングには出さない。手洗いしなければならないものはかためておいて、洗濯機も部分的に使いながら洗面台で洗ってしまうわたしだけど。

クリーニング取次店のおばさんにインタビュー。「人それぞれですね。毎日来られる人も、ワンシーズン分まとめてドサッという人も。そうですね、この月二、三万円位になるんじゃないですか、…きれいにしてシーズンオフを越したいですよね」等々。

洗濯に手間をかけなくなったことと、持つ枚数が増えたこともあるのだろうが、とにかく〝きれいになった〟という安心感が欲しいのとちがうかななどと思いながら、衣類管理の実態調査はないものかと探してみた。消費生活センターや役所関係に問うてみたが、公的な調査はなかったが、クリーニング業界が独自に調査したデータが業界紙にあることがわかった(「日本クリーニング年鑑 ,91年版」五千円)。

これらのデータを示しつつ、授業では自分の生活スタイルを確立することについて考えさせていきたいと思っている。

## 肩の力を抜いて

大分　江口初子

今春、三重高校に転勤が決まったとき、行政も前向きに環境問題に取り組み(環境保健課という課が役場の中にあります)、石けん工場も順調に運営されている所と期待して来たのですが、人が集まらず苦労しているようです。

生徒にアンケートを取りましたが、三重町に石けん工場があることさえ知らない子がいました。ショックでした。活動している者とそうでない者の考え方、意識の差。

授業では、「汚れとは何なのか」「汚れの落ちるしくみ」「合成洗剤と石けんの違い」「石けんによる黄ばみって本当か」「合成洗剤の人体、環境に与える害」などを、なぜわかってくれんのかなあと少々あせりながらやりましたが、ダメですね。もっと生活そのものに、命そのものに触れる授業を、ゆっくりゆっくりやっていって、子どもたちの生き方にゆさぶりをかけていかなければ。

少し肩の力を抜いて、でも自分の生活は意地を貫いて、自分の生き方、考え方を淡々と語れる人間になりたいなあと思っています。

# 私の本棚から

西本和代

▽『汚れとつきあう』　森住明弘著（'91年　北斗出版　1000円）

ハードな技術に頼らず、人と人とのつながりを取り戻しながら、環境問題に取り組んでいくことの大切さを説いている。

▽『100の洗い方と自家製石けん』（'90年　自然食通信社　515円）

もうピカピカ病からさよならしませんか。石けんだって使いすぎないを合言葉に、昔からの石けんを使わない洗い方マニュアルも登場。

▽改訂版『下水道革命』　石井勲・山田國廣著（'90年　藤原書店　2000円）

合併浄化槽石井式水循環システムの仕組みと日本の水環境を救う具体的な指針を示す。

▽『豊かなアジア貧しい日本』　中村尚司著（'89年　学陽書房　1550円）

洗濯、汚れ、食べもの、農業、援助、暮らし。具体的な例を通して、過剰社会日本の常識がひっくり返される。貧しい商品化社会から、脱商品化社会へ方向転換し、豊かさを取り戻すことを説く。洗濯ひとつで世界が見えるの章が特におすすめ。

『豊かさの裏側―私たちの暮らしとアジアの環境』　アースディ・日本（'92年　学陽書房　780円）

マレーシアのARE社（三菱化成の合弁会社）の放射性廃棄物による周辺住民への被害に対し、工場に操業停止命令が出た（'92年7月11日）。食べものや衣服や木材はアジアから、公害や農業や原発はアジアへの構図が、データとともに簡潔にまとめられている。巻末に＜あなたはどこからアジアとかかわる？行動ヒント電話帳＞もある。

▽『センス・オブ・ワンダー』　レイチェル・カーソン著　上遠恵子訳（'91年　佑学社　1200円）

大人から子どもに伝える最高の贈り物は、自然のいとなみの美しさや神秘に心を躍らせる心。『沈黙の春』のカーソン女史の遺作。

その他、ウイ書房の『新しい家庭科We』バックナンバーから、

'86／2・3月号　水はいのちの泉
'88／10月号　食と環境といのち
'89／10月号　食べものから地球をみる
'90／7月号　「環境・資源」を見つめる
'91／12月号　地球再生に向けて

などもおすすめです。

＜参考図書＞　環境図書目録「エコブックガイド'92」（トーハン　500円）

### 脱原発・明石「たこの会」

脱原発の社会とはいったい何なのかを考え、行動しているグループです。原発のないくらしを考えていると、あらゆる問題とぶつかります。これまでも、いろいろな角度から、この社会の在り方のおかしさを考え、少しでも人々にアピールしてきました。

そんななかで、自動販売機を調査しようという話が持ち上がりました。町に溢れる販売機、こんなに多い国も珍しいのではないでしょうか？　まず、六月に明石駅から賑やかな通りを調べました。

だいたい駅周辺で百台の自動販売機がありました。販売機を見ると、電力の問題だけでなく、使い捨て文明、ジュースなどの有害性なども出てきます。あちこちの地域で調べたらおもしろいのではないでしょうか。あなたの街でもいかがですか。

〒673　兵庫県明石市林2－15－7
佐藤緋紗子

### 自然と共に歩む会

「子どもたちの命を守ろう」と、環境や食物など身近な問題に取り組んで十四年になります。毎月、会報「大地」を配布、広報活動に力を入れています。合成洗剤や食品添加物などを生活の中から排除して、自然と共存できる道を探ろうと呼びかけています。一昨年、行政の力を借りて、廃油から粉石けんを作る「メルヘンシャボン工房」を設立、一般のお店にも販売をお願いしていつも在庫ゼロと好評です。固形石けんも同時に販売、売り上げ益で玖珠川に鯉を放流、これは七年目になります。

六月には、「玖珠川に清流を取り戻す会」が発足、全町的な運動に発展しました。

〒879-44大分県玖珠郡玖珠町庁　平田
宮崎優子

### ゴミを考える会

発足して二年半になります。様々な立場の人、（市民グループ、清掃現場、リサイクル業界、共働作業所等々）の話を聞くことができ、人のつながりがひろがってきて、実に貴重な力となっています。日常活動の交流と協力で、これからも、ごみを通して世の中に市

民の声を反映させていきたいと思っています。具体的な課題（紙、ビン、法改正、駅ごみリサイクル、ゴミと自然破壊）にもチームを作って活動していますが、有効な提案が出せず、じりじりすることもあります。

ごみ二法（廃棄物処理法改正とリサイクル法）については、法改正チームが森住先生やリサイクル業界の人、マスコミの人も交えて学習し、それぞれの解説書を出しました。六月末には「清掃条例を市民の知恵で作ってみませんか」という冊子を出します。

（解説書ご希望の方は連絡ください）

〒573 大阪府枚方市南楠葉1－61－4
☎0720-55-3483　中院彰子方

## 関西水系連絡会

山田國廣（元大阪大学工学部助手）さんが「石井式」水循環システムの普及のため学校をやめ設立した循環科学研究室。その事務所の一角を借り、関西水問題に取り組むグループが集まった団体。

（常駐の者はおりません。）

大阪中央区高麗橋5－10
☎06-946-2377
FAX06-946-2378

## 滋賀県環境生活共同組合

日本で始めての環境生協。一九九一年一月設立。四つの柱　①リサイクル事業　②合併浄化槽の普及　③環境を考えた商品の普及　④ソフト事業（エコロジーマーケットの開催など）からなる。

滋賀県蒲生郡安土町上豊浦1273
☎0748-46-4551
FAX0748-46-4550

## 日本・モンゴル文化経済交流協会

日本の観光客がモンゴルの自然を壊すことがないようにと、石けん製のトラベルセットを配布したり、一昨年には廃油から石けんづくりのプラントを送ったりしている。

大阪市住吉区万代東　佐藤紀子代表
☎06-606-3326

インタビュー

聞き手
間瀬中子

# 複眼でみる

## —仕事も好き、遊びも好き—

# 上條茉莉子さん

「大学まで男も女も同じ道を歩んで、社会に出たら同じことをやっても評価が違うなんてたまらない……」と思っていたという上條茉莉子さん。同一の職務に対して男女同一の待遇を与えているといわれる日本アイ・ビー・エム株式会社の女性管理職の立場にある上条さんに、最近の若い女性たちについてどんなことを感じておられるか伺ってみました。

プロフィール

1938年東京生まれ。東京大学理学部数学科卒。'62 年に日本アイ・ビー・エム（株）に入社。以来、主として公官庁、製造業界における科学技術アプリケーションの開発に、分析、設計、プロジェクト・マネージャーとして従事。'67 年より一年間、米国ノースイースタン大学へ留学。共著に『シミュレーションの基礎』。

## システムエンジニアとは

**上條**　まず、システムエンジニア（ＳＥという）という仕事ですが、ＳＥとは、システムの導入を行うコンピュータ技術者のことをいいます。たとえば、銀行のオンラインシステム。一般には窓口の端末機しか目にふれませんが、この後には、通信回線で結ばれた膨大なコンピューター機器類、ソフトウェア群、システム操作員、業務担当者などが動いているわけです。

システム構築とは、これらシステム要素の一つひとつの機種や規模を決定し、基幹ソフトの選定を行い、操作の手順を確立する、業務ソフトの設計や開発、さらに障害時の対策について、故障診断の方法の確立、手順の開発を行い、充分なテストを経て、稼働状態まで持ってゆくことです。さらに、ユーザー向けマニュアルを作り、要員教育など……。システムの提案から稼働までを総合的にプロデュースするのがシステムエンジニアです。

私がこの会社に入ったのは、コンピューターが日本に広まってきた時ですから、ちょうど三十年前くらいでしょうか。まだまだ大型コンピューターも珍しくて、日本に数台でした。最初、私が入った時には、システムエンジニアが五十人いて、その中に女性が五人。一割ね。でも、そのうちの三人が、現在もちゃんと現役で働いています。その当時の女性の仕事として、ＳＥという職種は、先端的な、草分け的な仕事でしたし、非常に面白かったんですよ。だから、続けてこられたといえるでしょうね。

その後十年くらいの間に、中型や小型のコンピューターが普及し始め、その頃かなり大量に、コンピューター技術者を、女性も含めて採用しました。

だけど、その頃入った女性ＳＥたちは、入社後五年～六年で、ワーッとやめていっちゃって、気がついたら残っていない…。結婚退職が多かったですね。さらに十年ほどたつと、社会全体としてコンピューター技術者、特にＳＥの需要が急増し、当然、人が足りないという事態になって、女性を本格的に採り出したんですね。今は二割か三割が女性です。

ＳＥというのは非常に幅広い知識と経験を要求されるので、育成にはたいへんな時間とお金がかかります。まず一年間は完全にトレーニングの時間としてとられ、ほとんど仕事にはなりません。たまに配属先に戻ってきて

も、その時も、次のコースの予習を先輩に聞きながら勉強してますから。

**間瀬**　コンピューターの勉強が多いんですか？

**上條**　そうですね。コンピューターシステムが中心ですけれども、それだけじゃないです。企業経営の現状分析から、どのようなシステムが最適かを検討し、お客様に提案し、契約を獲得するというプロセスに必要ないろいろな技術を勉強します。ちゃんと会社の中にスクールがあって、卒業しないとSEなりセールスマンという職種にはなれない仕組みになっているんですね。そこを出るのが非常に大変ですから、卒業するとやっと出たという感じで、配属先に戻ってきて皆でワーッとお祝いをして、そこからがスタートになります。

スタートしたからといって、すぐに仕事が一人前にできるわけではなくて、毎年二十何日かは完全に、受講という形でのトレーニングを受けながら仕事をしていくんです。

だいたい、一人前になるにはSEで八年、セールスマンで四年かかります。会社としてはそれだけお金をつぎこんでいるわけで、五年でやめられちゃったら元も子もないので、入社の面接では、この人は続きそうだなという人を見ながら選んでいるわけですけれどね。

### 頑張る人生を勧めない

最近ショックを受けたのは、一番油の乗ってきた時期の女性社員が「やめます」と言ってくるケースが、何件か続いて起こったことです。比率から言ったら男性だって結構やめる人は多いので、なんともいえないのですが…。一年間のスクールをくぐりぬけて、その後も結構きびしい仕事をこなしてきた人たちだから、彼女たち頑張ってくれるのかなと期待をしているにもかかわらず、あっさりと、「家庭に入ってしっかり主婦するのが夢でした」なんていうわけです。最近そういう話が目立つようになってきて、やっぱり時代が少し変わってきたのかなという気がしますね。

男性も女性も世の中の動きにつれて変わってくるものだと思うけれど、特に、今仕事につきはじめた人たちというのは、生まれた時から豊かな生活で育ってきている。だから、苦しいこととか大変なことというのは、あまり経験したことがないのじゃないのかな。

そうすると、仕事をしながら家庭を持って、もし子どもも欲しいと思ったら、現状ではすごく大変なわけですよね。先輩を見て、頑張ってやっているなと思ったとしても、「あの人すごいな、だけど私にできるかしら、自分はあんなのやりたくないわ」というのが正直な気持ちだろうと思うんですね。

もし頑張って子どもを生んでも、仕事をするとなると、結局、まず自分の母親に頼るわけですよ。お母さんの方も、団塊の世代より少し上の方たちでしょ。そうすると彼女たちも「なぜ娘がそんな大変なことまでして働かなければならないの」と思うし、お母さん自身にも結構負担がかかって来るから、孫は可愛い、でも、たまに会ってチヤホヤするのはいいけれども、長い間子どもを押しつけられるのはかなわないな、というのが多分あるのだろうと思います。

日頃、「私は仕事を続けます。二つ道があったら苦しい方を選びます」といっている人がコロッと変わるわけですよ。いろいろ探ってみると、やっぱり母親の意見かなと思うことがあります。パートナーの方は、「君がやりたいのだったらどんどんやりなさい、僕だって協力するよ」という人が最近ふえているようですけれども。

**間瀬**　お母さんというのも変わってきているんでしょうね。お母さんが孫の面倒をみるというかたちでしか、女性が仕事を続けることに対する社会的援助がないというのは、いいことかどうかは別の問題として。

**上條**　お母さんは、子どもをやっと一人前にした後は、孫の面倒をみるよりも自分の人生を生きたいと思うんでしょ。それはそれでいいんだけれども、娘に、「頑張る人生」を勧めないというのがあるんですよ。ということは、母親たちが結構専業主婦として満たされて幸せなんでしょうね。女の子は母親の生き方の影響をすごく受けるようです。

一方では、日本が追い求め実現してきた「豊かな生活」を維持するためには、好むと好まざるとにかかわらず、女性も継続的に働いていかないと、あるいは老人だってなんらかの仕事をしないと、やっていけない時代と言われますが、そういうことは誰も身近な問題として認識してはいない。

女性がそんなに大変な思いをしなくても働き続けられる環境を作るというのは、ものすごく大事なことですけ

れども、そのためには、男性の家事、育児への参加とか、その辺の意識改革が大きい問題だという気がします。そうすると結局、小さい時の教育の問題になっちゃうなという気がするのね。

## いい学校イコール社会の成功者は、幻想

私もＰＴＡの役員を一年引き受けてみて、男の子の育て方とか、そういうことを投げかけたことがあるんです。ＰＴＡに出てくる人というのはほとんど母親ですよね。彼女たちは「進学一辺倒ということについて一回徹底的に議論すべし」と言いつつも、自分の子どもはやっぱり塾に行かせるでしょ。それでいろいろと情報を仕入れて、進学競争に乗り遅れないように、進学という面で一番いいポジションにつけるようにやっているわけね。

私はずっと企業の中にいるわけだから、いい学校を出た人が会社の中で、あるいは社会の中でいい仕事をするかというと、全然そうとは限らないというのを見てきています。ですから、いい学校イコール社会の成功者という図式は幻想だということがわかる。でも、母親たちは全然それがわかってない。

**間瀬**　どんな人が伸びていますか？

**上條**　やっぱり自由な発想のできる人ですよ。かなり踏みはずしても自由な発想ができて、実行力のある人。間違いなく、どこの企業だってそうだと思いますね。

ただそういう実態をお母さんたちが全然知らされていないわけでしょ。会社で働いている男性はよくわかっているのだけれど、それを正しく伝えてないのね。

たとえばいい大学を出て会社ではそこそこの地位にあっても、本当の実力者でない場合もいっぱいあります。本人は、よく承知しているけれども、何々という肩書で私は偉いんだと、家族や世間には伝えているのでしょうね。だから、母親が自分の子どもをいい大学へとかりたてる図式は全然なくならない。

そうすると、男も女と同じように家事をして、という発想にはまったくならないから、子どもに「寸暇を惜しんで、勉強しなさい」ということになっちゃうんですよ。

**間瀬**　むしろ教育ではなくて企業の現実から、「男性も家事をした方がいい」とか、「個性的な教育を」なんていうふうに変わっていくかもしれませんね。人間って現実的なところからしか変わっていかないから。

**上條**　今は企業も教育界もお互いなんですよ。いい大学に入れるということの方がやりやすいし、企業も、人を選ぶのに一時間くらいの面接ではなかなか判断できないから、結局、有名校から採用したがる。個性を伸ばすとか、ユニークな発想を育てるなんていったってやり方が難しいし、教育も難しいと思うんです。だから逃げちゃうんでしょうね。それに、やらなくても誰も追及しないでしょ。でも、企業の実情を知ったら、お母さんたちが教育制度を変えていくと思いますね。

## 埋もれさせてしまうのはもったいない

**間瀬**　ところで、今の若い女の人たちをみていたら、自分たちと違ってこういう面白い面があるんだな、なんてことを感じられることはありますか。

**上條**　やっぱり「重く」ないんですよね。私たちの世代は「何かやらなくては」という責任感みたいなものが重くのしかかっていたけれども、そういうのは比較的ないですね。それが本当だろうとは思うんですよ。若い方たち遊びも好きね。退社時に、「仕事大好きです。でも、今から遊びに出かけます。はい、さよなら」っていうような感じがいいんじゃないかなという気はしますね。

私は、さっき、若い彼女たちがやめるという話をしましたけれども、いったんは「はい、結婚します」といってやめても、そのうち帰って来るような微かな希望があるの。だから、もう少し見ていたいなと思います。

**間瀬**　それはどういうところですか。

**上條**　仕事をするということは人生の中で一つのかなり重要な位置を占めると思うんですね。結婚を選んだところで、ある程度経験しちゃうと、また物足りなくなっちゃうんじゃないかなって気がするんです。大きな仕事をやり遂げた充実感、自己実現の楽しさみたいなものが、また彼女たちを仕事に引き戻すのではないかという気がします。だから、ショックを受けたと言いましたけれども、やめた人たちときちんとコンタクトをとって、また十年後に、同じ仕事でなくてもいいけれど何かのかたちで帰って来ることができるようにしたいです。

これだけ高学歴で、それぞれの会社の知識と技術をある程度身につけているわけでしょ。数年使っただけで、埋もれさせてしまうなんて、本当にもったいない。でも、十年間完全にブランクがあっては、こういう仕事に戻れ

ない。だから、なんらかのかたちで仕事に戻れるようなことを、家庭に入っても少しずつ習得出来る仕組みがあってもいいのではないか。

**間瀬**　そういうことは私も感じますね。技術系の仕事はブランクが長いと戻れないのがネックでしょ。私自身も理科系の仕事でしたから、戻れない絶望感から仕事への復帰をまるであきらめた経験があります。

だからそういう意味で彼女たちが何かコンタクトをとれるシステムがあったら……。

**上條**　通産省の外郭団体で、日本工業技術振興協会というのがありますが、ここの呼びかけで、今、女性の技術者、科学者を集めて「女性技術者フォーラム」というネットワークを組織しようとしています。女性技術者の働きやすい環境作りを目ざして、企業、業種を越えた交流の場を作ろうというものです。その一つの目的として、求職者や退職者が、技術が錆びつかないようにする仕組み――たとえば、通信衛星を利用した教育システム――の提供を考えています。

また子育て中、あるいは子育て後の女性技術者が自分のライフスタイルや好みに合わせて、フルタイムじゃなくて、たとえば、大学に行くとか半日働くとか、いろんなやり方があってもいいと思うのです。

それからお客様のニーズというのは一社のものだけではなく、富士通も使えばＩＢＭもＮＥＣも使うようになってきている。そうするとＩＢＭだけの人ではできないし、他のところの人だけでもできないでしょう。こういうニーズに応えるグループが生まれるかもしれません。「女性技術者フォーラム」は、そんな社会の新しいニーズに合致したところに新しい道を見いだす支援をしていきたいと考えています。

**間瀬**　女性が出産後も仕事を続けることは大変だと思いますけど、もっと大変なのは、ある年齢になって仕事に戻ること。

**上條**　戻るのは大変なんですよ。おかしいと思うのは子育てが終わって四十歳過ぎて、さあ働こうと思うと、年齢制限三十五歳まででしょ。あれはおかしい。だから、募集する人事の人はわかってないというか…。

再就職しようと思っても、まだまだ仕事がほとんどないですよね。まして、技術を活かせるような仕事にはほとんど採用してもらえない。と言っても、育児休暇が一

年や二年あったって、子どもが小さい間は仕事と家事の両立というのはしんどいですよね。ある場合には、思いきって退職し、子育てに専念してから、不利な条件にならずに再就職という道がとれたら…と思います。企業側でも再雇用制度を発足させるケースも出てきましたし。どちらにとっても、キーは技術レベルの維持でしょうね。

**間瀬**　今の若い人たちはある意味で女性もわがままに育っているから、私たちの時代と違う形でパートナーシップをやっていけたらいいかなという気がするのですが。

**上條**　その辺は相手にサラッと「あなたも家事やってよ」と言えるかどうかにかかっているわけねだけど、彼女たちからは、ためらうことなく言えるんじゃないかなと思います。ただし、受ける男性の方が問題で、まず、意識も含めて基本的な訓練ができていない。過保護に育っているわけですよ。だから、子どもには出来るだけ早い時期にいろんな経験をさせた方かいい。家事だって育児だって、男性がやっても結構面白いのだということがわかる程度まで、教育してほしいです。それがみんな、良い学校へ進学という同じ方向を向いている。どこか違ったことをやるという子がでてきたら、それを大事にしてほしいと思います。

**間瀬**　ところで、上條さんにとって仕事ってなんでしょう？

**上條**　一口に言って「好きなこと」なんですよ。男性と同じように会社人間でずっときてしまったなという気がしますけどね。でも、けっこう楽しんでやってきたんです。子どもを三人育てながら。今、年老いた母もいますし、老人問題についてもいろいろなことが見えてきました。それだけ多様な世界を生きてきたと言えるでしょうか。

だから、今の若い女性にとっても、家庭に入って、狭い世界に閉じこもるなんてことに耐えられるだろうかと思うんですよ。絶対、彼女たちは社会に出て来ます。

◇　◇　◇

六月二十五日に「女性技術者フォーラム」の設立総会があって、私も出席しました。様々な企業に勤務する方々、大学研究者など、年齢も若い方から中年の方まで大勢参加されていて、今までにはないネットワークを予感させ、これからの活動が期待されます。　（間瀬中子）

佐藤　通雅

# かりん区便り　3

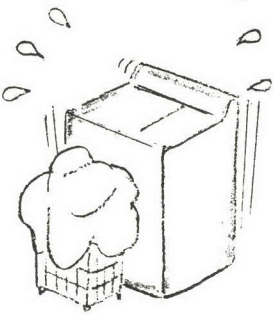
今年退職したO先生に先日会ったとき、こんな話をしてくれた。家の近くに小学校がある、先生が生徒を叱りながら整列させようとしている、もうこんなことしなくてもいいんだと思ったら気分が爽快になった……。ウーンと私はうなり、かつとてもうらやましくなった。現職であること、それは何よりも日常的に手を汚すことだ。バラバラな生徒を一つにまとめようと叱りつけ、授業のふんいきを乱す生徒を抑えつけ、悪いことをやった生徒をどなりつける。この「――つけ」漬けにあるのが教師の日常だ。生徒との感情的トラブルも絶えない。その上雑用が次々とある。一日でも休もうものなら、次の日にそのツケがドッと来る。私はこの頃夜中に目を覚ます。あの仕事をまだ片付けていなかったっけ、あ

れもしなければならぬ、どうさばいたらいいのだ……あれこれが去来しはじめ、目が冴えてしまう。当然寝不足。年齢とともにこういうゴタゴタがつくづくいやになってくる。そこである人は管理職になって、少しでも高みの見物のできる場所を得ようとする。しかしこの頃はそれほど安楽な所でもないとわかっているから、誰もがなりたがるわけではない。それならどうするか。どうにもできない八方ふさがり。私は時々学校の裏山にでかける。雑木林を歩きまわる。その中に秘密の池がある。ここに来た誰かは知っているから、完全な秘密ではないが、人はめったに来ない。水のほとりに腰をおろし、揺らめく木々や緑や空の青をボーッとして見る。この無為の時間。どんなに無為に渇いていたことかと、つくづく知る。「――つけ」漬けから解放された静かでしっとりした、この上もなく爽快な空間。つまり自分自身に立ちもどることのできる場所。やがて私は、少しは生き返った心地になって学校にもどる。

ところで、いきなり話をマジメな方に切りかえるが、学校にとって必要なのは何か――。すぐれた授業でもよい教師でも理想的な教育でもない、何ものにもとらわれない時間と空間である。こういういい方をすると逆説めいて聞こえるかもしれない。が、生徒も教師も秘密の池を前にしたような無為の、自分に返る場所に飢え渇いている、それが本音だ。学校にいて楽しいのはどういう時か。それは生徒や同僚と、日だまりの猫の心地になって無為に談笑している時だ。こういう時間がどんどん狭められ、息づまる状態にいつの間にかなってしまった。それは学校独自の問題というよりは文明の在り方にかかわる。組織をフル回転させ、機能性を高め、上へ上へと上昇しようとする。ついに無為は怖れられ、罪悪視さえされるようになってしまった。だが、これで頓挫したわけでない。自分の場所をまるごと奪われないための作戦を立てなければならない。正直なところ、この頃相当きつく、つい退職者0先生のことばにウーンとうなってしまうのだ。（カット／佐藤　通雅）

# 現代衣生活考

むらき数子



## 何日着たら洗う？

制服のズボンを出しに行った息子が帰ってきて、

「また、クリーニング屋ができたよ、やってけるのかなア」

わが家の周辺には、スーパーを中心に、半径一〇〇メートルの範囲に八店。ワイシャツ二五〇円以上、ブレザー一〇〇〇円、水洗い・ドライともこなす技術本位の店から、ワイシャツ一五〇円、ブレザー四五〇円の取次店までよりどり。興亡が激しい。

一世帯あたりのクリーニング代は低下している中で、クリーニング所は一九六〇年の約三万六千から、取次店の激増によって八七年には十五万。家庭で大型洗濯機で大量に洗濯するいっぽうで、ドライに出す物がふえている。

戦後間もない五〇年に吉村和子が行った調査を見ると、当時の主婦は学生服は年一回洗濯すれば合格点を貰えたようだ。

私が中学生だった六〇年頃には、セーラー服は一学期中着続けて、長い休みになってはじめてクリーニングに出したものだ。クリーニング回数は年三回。セーラーの上衣で三か月、スカートは一、二学期はまる四か月も着続けたのだから、テカテカ光る学生服は、女子も男子も、近寄れば汗と埃のまじった異臭が漂った。何か月も洗わない体操服を誇示する男子さえいた。それが当時は若者に固有の行動であり匂いであるかのように思っていた。

「さわやかな青春」の実態は不潔だった。

今、制服のファッション化が進み、夏と冬とではスカート・ズボンが異なる学校が増えているから、着続けるのは長くても三か月。息子は即日仕上がりのドライ店へ月に一度くらい、汚れれば週に一度でも出しに行く。

「一学期間着続けろと言ったらどうする？」

「二〇〇円なら自分のこづかいでドライに出す」
高二のT少年は柔道着を毎日自分で洗濯する。男子高校生達とエレベーターに乗り合わせても、異臭におびやかされることはない。（整髪料の匂いプンプンはオジサン達だ）。

ところで、家庭での洗濯とは、何日着たらするものなのだろう？

洗濯機に合成洗剤を箱からザーっと入れ（計量せずに）注水すすぎにするのが当たり前、大量生産大量消費の大衆社会と言われ始めた頃、六七年に、堀志津（『婦人の友』の「友の会」洗濯指導者）の実験では、一年間六人家族の洗濯は、週に六度、一日平均三八分要し、約七千点だった。衣類だけでなく寝具・ふきん・雑巾などまで含めて、週当たり一三四・六点、一人当たり二二・四点ということである。

六九年の林雅子らの調査では、ワイシャツは二日着る人が半数。この頃、おしゃれを自認していた若い男性教師が、「白いワイシャツなら二日続けて着られるけど、ピンクのだと、すぐ生徒に『昨日と同じ！』って言われるから続けて着られなくって」とぼやいていた。

七〇年夏、七一年冬の二度にわたるライオン家庭科学研究所の調査によれば、夫婦と子供二人の四人家族の、一週間の洗濯物は夏は一三七点、冬は一一五点。（衣類だけでは夏八六点、冬七〇点、一人当たりでは夏二一・五点、冬一七・五点）

七〇年代の着用テストを見ると、綿メリヤスシャツ二日間、スリップ二日間、綿ランニングシャツ一日間。毎日「脱いだら洗う」習慣はまだなかったのだ。

七〇年頃には、乾燥機利用とあいまって、まとめ洗い・洗濯時間の短縮に進むだろうとの期待があったが、現実は、フルタイム勤務の主婦も毎日洗い、干し続ける。日本独特のくり返し洗い習慣（同じ洗濯液で二〜三回洗う）も続き，洗濯物はふえる一方、洗濯回数・時間は不変。

八六年、堀志津が『ニュー・ライフ・ブックス　洗濯上手の知恵ノート』に書いた目安（ワイシャツ＝毎日等）を，六人家族にあてはめてみると，衣類だけでも一週間一八五点以上、タオル・寝具等を加えれば二五〇点以上となり，堀自身二〇年間にほぼ二倍洗うようになっている。

私が八九年秋に行ったアンケート回答を見ても、洗濯

の頻繁・大量化がうかがわれる。

Oさんの世帯（大人二人、小学生男女二人）の基本的な一日の洗濯量は、「下着上下＝各四。ワイシャツ・Tシャツ＝各四。ブラジャー二。半ズボン一（毎日）。スカート一（隔日）。靴下四。ハンカチ二〜三。バスタオル一。タオル三。」＝二五点。休みの日には大物が加わる。週に衣類だけで一三七点以上、一人当たりでは三一・五点以上。つまり基本的な衣類だけで、七〇年調査の総量に等しい洗濯をしている。

毎朝毎晩の入浴時にそっくり下着二組洗濯に出す中三Y少年、「中三の娘は何でもバンバン洗濯に出す。ジーパン綿パンのかさばるものも一〜二回はいただけで出す。洗濯物の四分の三は娘の物」と四人家族のSさん。

私の息子を見ても、いまどきの十代の子供たちは週に五〇点以上の衣類を洗濯に出していると言える。

複数の子を持つ母親からの回答に、年下の子の方が男女を問わず上から下まで「脱いだら洗濯に出す」傾向がうかがわれる。「次女が、脱いだ物は入浴した後、すべて洗濯物に出してしまうので、ズボンやスカートは又たたんで戻しておきます」と、わたりあっているKさんの例に明らかなように、子供たちは、実際に洗濯してなくても、洗い上がりのようにたたんであれば安心する。

だいたい、誰も、一時間着た物と五時間着た物の汚れの違いなどはわからないのだ。かくして清潔志向のゆきつくところ、「脱いだら洗う」＋洗濯の趣味化＝洗濯の頻繁・大量化。

頻繁に洗うようになったのは、衣類だけではなく、タオル・シーツ・カーテンなど繊維製品全般に及んでいる。かつては打ち直しだけで洗うものではなかった布団も丸洗いするようになった。

毎日洗濯している四人家族（長女中三、次女小六）のNさん「子が成長して、洗濯物のかさが高く、三kgの洗濯機では時間がかかり、大型が切実に欲しい」。五人家族のKさんの回答に、「娘は自分ですべてやるが、洗濯はほとんど毎日私が大型四・五kg洗濯機でやる。日曜日はシーツなども含め四回くらい回す」＝週に四五kg。

八〇年代初めから家電業界が意識していた「着たから洗う」大型化が、一般家庭の現実になりつつある。

六〇年代には一・五kgが普通だった洗濯機は、九〇年には四kgの機種が伸び、店頭には六kgの隣の二・五kgの

物には「少人数、シングルライフ向き」とチラシが貼ってある。今春、八kgを売り出したメーカーのパンフレットには、四人家族（夫婦と中学生男子、小学生女子）で一週間四〇kg、衣類だけで一五七点、タオル寝具類をあわせて二四六点。一人当たり六一・五点洗うことになっている。

日本の家庭洗濯の特徴は、〝少量づつ頻繁に（ほとんど毎日）水で短時間洗う、洗剤液を繰り返し使うこと〟と指摘されてきた。それを前提に、家電業界は小容量だが水を多量に使う割安な洗濯機を、洗剤業界は低温で作用する洗剤を供給してきた。洗浄力に次々と付加価値を付け加えて新製品を大量生産し、売上総額の一割をも宣伝費につぎ込み大量消費を誘導してきた。

そうした中でも、家電企業は、洗濯機を節電節水の方向へ改良してきた。洗剤企業もソフト化、無リン化することで安全性・水質汚濁・環境汚染に対応してきた。

だが、石鹸も合成洗剤もどちらも界面活性剤、多量に排出されれば環境を汚染する。水・電気・洗剤の洗濯物一kg当たり消費量が二〇年間で半減しても、洗濯物が倍増しているのだから、消費は増大し、下水処理に要する社会的資源も莫大になるいっぽう。

これを浪費・環境破壊と見るか、生産・流通に従事する雇用が増え経済が発展している、と見るか・・・。

洗剤企業関係者は「洗剤の一人当たり消費量は、その国の文化のバロメーターである」という言葉を引いては、日本の一人当たり消費量の伸びの鈍いことを嘆く。だが、平地面積当たり消費量を見れば、日本は米国の六・五倍にもなっている。

そもそも、合成洗剤は、戦争中に発達した合成化学の民生応用として石油を原料として伸びてきた。七〇年代のオイル・ショックによる洗剤パニックの直後ですら、食料資源と競合する動植物油脂よりも石油を、というのが業界の主流だった。湾岸戦争の直前になって〝再生産可能で生分解性の高い天然油脂由来の原料へと徐々に変わって行くであろう〟との見方が出てきた。天然油脂とは、かつては鯨油や魚油だったが、現在ではマレーシア・インドネシアで生産されるパーム油が主である。

だが、石油にしてもパーム油にしても、洗剤の原料のために、戦争を起こしたり、産地の人々を飢えさせたりしてよいものだろうか？

# 地域の暮らしと家庭科教育

石川尚子

## 三、麦を食べる

### （1）身土不二と一物全体食

食物教育の柱は、健康教育と食文化教育であろう。そのことを考えながら、食物の時間にまず黒板に書くのは、「身土不二」「一物全体食」という二つの言葉である。

私なりに解釈すれば、「身土不二」とは、地域の食べ物・季節の食べ物が、身体をつくり命を育む源、身体と土地とは別々のものではない、ということになろう。

さて私が住む埼玉県比企地方は、かつて大麦・小麦ともに生産量が多く、関東一帯に広がる麦食文化圏の一翼を担っていた。そこで、地域の暮らしの中の、食を学ぶはじめに、麦食について取り上げることとする。

### （2）麦の食べ方いろいろ

地域のおとしよりに、昔の話をうかがったことがある。昔に比べて今は極楽とおっしゃりながら、かつての暮らしを、なつかしそうに話して下さったが、食生活では、麦に関する話題が多かったことが印象に残っている。

次の文章はその一部である。「米だけのごはんを食べることは、どんなお大尽（金持ち）でもめったになかった。大麦はひきわりや押し麦にし、朝昼とも麦飯だったが、米と麦は一緒に炊くとわかれるので、学校へは麦の少ないカタッパジメシを持っていった。小麦は、ツメリッコ（スイトン）、オッキリコミ（ひもかわの煮込み）、ウドン、ベッタラヤキ（おやき）、マンジュウなどにしたが、夕飯はどこの家でも、たいていウドンだった」

労働がきつく、経済的なゆとりもなく、きりもなく忙しい農作業の合間につくらなければならないため、食事づくりは、手間がかからないこと、身近にある食品を利用すること、栄養的であること、食欲をそそること、無駄をしないことが必須の条件であった。

うどん打ちは、手間も暇もかかるけれど、一日一回は必ず食べたものだという。なかでも、ごま・みそ・ねぎ・しそ・きゅうりを用いる香り豊かな「冷や汁うどん」、

野菜・いも・きのこを炒めて、ひもかわをそのまま煮込む滋味溢れる「オッキリコミ」は優れた郷土料理である。

私も調理実習で何回か取り上げたが、「冷や汁うどん」も「オッキリコミ」も、なかなか好評であった。

また、食用にはならない藁を、麦笛や麦藁細工、屋根葺きなど、遊び道具や生活用品に作りかえて無駄にしなかったのも、「一物全体利用」の知恵といえる。

（3）麦食から暮らしを見る

麦は雑穀の一種で、米の代用品といったイメージがあるが、米以上に多彩な食べ方が工夫されている。

地域に残されたこのような知恵や技術を学ぶとともに、たとえば、マンジュウひとつをとってみても、酢饅頭や炭酸饅頭、ユデマンジュウやフカシマンジュウなど、地域により、家によって個性があったこと、うどんの食べ方も、ゆで汁は捨ててしまうツケウドン、ゆで汁もろとも食するオッキリコミ・ズリアゲ、さらには、他家からゆで汁をもらって食事がわりにしなければならなかった極貧の生活もあった事実、などにも目を向けさせたい。

こうした身近な食の歴史や現実を通して、社会を見つめ直すことも、家庭科教育ならではの視点といえよう。

うどんを打つ　松永信子

# 産む・産めない・産まない

リレーエッセイ（3）

小堀 直子

「出生率が一・五三に低下」、「一・五三ショック」という言葉を聞いても、当初、あまりピンとこなかったというのが正直なところであった。私には、三人の子どもがおり、私のまわりには、二人・三人の子持ちが多いことがまず一つあるのだが、既婚者の出産率は二人を越え、微増したそうだ。

さらに、人口が少なくなって「ショック」と感じているのは、誰なのか、という問題がある。高齢化社会を支える若い世代が減ることで困るのは、もちろん皆の問題なんだけど、一番困るのは、政府や財界の人なのではないだろうか。むしろ、密かに「女もやるじゃないか」と、産まない事を選んだ女たちにラブ・コールを送りたい気持ちを感じたくらいだ。

「結婚して当たり前」「子どもを産んで一人」という古来からの女性の役割分業という枠組みからは自由でいたい、そんな生き方をしたい、と私は思ってきた。たとえば、女性教師への批判の中で、「あの先生は子どもを産んでいないから、独身だから、子どものことがわからない」という批判には、これまでも反論してきた。

とはいうものの、この原稿を書くにあたって、結婚、出産ということに対して、どこまで考えてそうしてきたのか……と考えてみて、あまり大してこだわらずにやってきたのではないかと、少々反省しているところである。子どもは一人より二人、二人より三人ぐらいはいた方が、子どもの為にもいいだろうと、漠然と考えていたことは確かである。

好きな畑仕事から、農業や食べ物のことへ関心を広げ、有機農業運動や反原発運動など、様々な市民運動に出会う中で、私は今まで、〝いのち〟を大切にしない世の中の考え方を根本的に変えないといけない、とか、子どもたちに豊かな未来を残すためにくらしから変えようなどと言ってきた。また、反原発運動のニューウェーブの担

い手は「子づれの母親」で「生命を育む母親」だから、直感で原発や放射能への拒否反応を示し、原発社会を認めない動きの中軸を作ってきた。

しかし、この「母親」を中心とした女性の運動は、力強さと同時に、狭さも内包していた。ある時、障害者から、放射能の危険性を訴える私達の言葉の中に、障害者の存在を否定するものが含まれている、という糾弾を受けたのだ。

そのことは、「母親だからこそ反原発を言う資格がある」みたいに、「母親の運動」を強調するマスコミや、男性や、あるときは女性自身の言葉に、何かしっくりこないものを感じていた私に、いろいろな問題を気づかせてくれた。

反原発運動の担い手の女性は、母親だけではもちろんない。シングルも、また、カップルでも産まないことを選択した女もいるのだ。運動の中でそんな女たちにたくさん出会うこともできた。そして、いのちを大切に考え、競争社会に異議を唱える者が、いろいろな形でさまざまな運動をしていく中でしか、社会を大きく変えられない。

また、いろいろな運動の中でも、今まで、女や子ども、障害者など、お荷物扱いされてきた「弱者」こそ主人公になれる運動が反原発運動であったのだ。

環境の悪化した現代の地球で、子どもを産み、育てるのは罪悪と、子どもを産まない女もいる。環境だけでなく、社会環境も整っていない。今でも男性優位の社会である現代日本で、「産まない」ことは、女に残された最大の武器＝女のストライキだといえるだろう。

産まない女も、産んだ女も、シングルも、居心地のいい関係を作っていける雰囲気が、反原発をはじめ、いろいろな市民運動の中でできつつあるが、それが、社会全体に広がっていけば、出生率の低いことも高いことも問題ではなくなるのではないかと思う。

こぼり・なおこ　一九五〇年生まれ。只今、休職中。ただし、運動と専業主婦を両立するやり方で。反原発、反天皇など、いろいろな市民運動に関わる。

◆編集部から…この頁は、皆さんからのお便りでつないでいきます。「産む・産めない・産まない」に関する皆さんのご意見を、八五〇字以内にまとめてお送りください。（送り先　神戸市灘区上野通七―一―四、吉田清彦）

# ヤング・インワンダーランド

今号のテーマ

## 続・日本人

加藤由美子

――日本へいらした動機は？

◇　アイルランドは、今、失業率が20％。仕事がないから、大学を卒業したら、すぐ、外国に出ることを考えていましたね。英会話学校の教師をしているのだけれど、最初は半年くらいと思って来ましたが、楽しくて長期滞在することに決め、日本語を勉強し始めました。もう、一年半位になります。

――日本に来て、なにか面白いと思ったり、びっくりしたことありますか？

◆　うーん、まず、靴を脱いで家の中に入ること。とても素晴らしい習慣だと思う。去年、一時帰国したとき、つい靴を脱いで家に入ったら、父が驚いていました。この先、自分の家は、靴を脱いで入ることにしようと思っています。玄関に「靴を脱いでお入りください」って書いてね。

◇　それから、お風呂に夜入るということも…。私たちは朝入って、きれいに身づくろいして出かける、と思っているから。日本は、リラックスするためのお風呂で、目的が違うんだね。それと、お年寄りが活動的で若いこと。アイルランドではお年寄りはもっと家の中に引きこもっています。

◆　治安のいいことにも驚きました。夜遅くの女性の一人歩きは、日本に来るまで考えられなかったし、英国やアイルランドの都市部では、親が子どもの学校の送り迎えをしています。

――外国人だからと、差別されたことありますか。

◇　いや、ほとんどないです。ただ、明らかに髪や目の色が違うから、怖がられているな、と感じることはあります。特に、東京以外で。でも、ほんの少し。それに、自分たちは、外国人に理解のあるオーナーのアパートに住んでいるので、ラッキーです。「外人ダメ」で、二十

軒も不動産屋をまわることも珍しくないというから。

でも、白人とみると、まず「アメリカ人か？」と聞かれ、「英国人か？」とは決して聞かれない。アメリカ人以外の白人にとっては気持ちのよいものではありません。

――外国人に対して、怖がったり、逃げたりすることの重大な理由の一つに、言葉の問題があると思うけど…。

◇　日本人は自意識過剰で、恥ずかしがり。悪いことではないけど、他国の人とつきあうには不利です。それに面目を失うことを、とても恐れているようにみえます。

――日本の学校教育について、どう思いますか？

◇　会話のやりとりがほとんどなくて、教師が説明して「覚えなさい」、そして、「何かわからないことありますか」のパターン。いま、高校でも教えているのですが、英語の時間に、もっと会話を増やすように提案したら、その結果、生徒たちが以前より気軽に話してくれるようになりました。

アイルランドでは、経験を通しての学習が多く、子供達が理解するまで、時間をかけています。学校は公立のみで、地域の学校に通い、大学受験は、全国同時に同じ試験をします。日本の、塾の存在は、理解し難いですね。

◆　日本の子どもたちは（よい学校へ入るための）プレッシャーが強いように感じます。アイルランドだったら、まだ、お母さんにしがみついているような子どもが、制服やカバンを身につけ、定期券を持っていたので驚きました。

――国際化、国際化と言われていますが…。

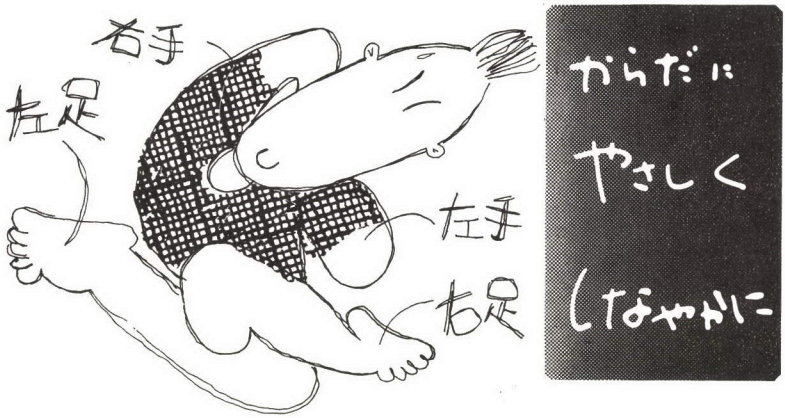
◆　日本は鎖国が終わってから今までは、うまく伝統文化を守りながら国際化してきていると思うけど、これからも、国際化をあまりあせらないで、日本の伝統文化も大切にしたほうがよいのではないだろうか。

アイルランドには、かつて英国に支配され、自国語を失ってしまった歴史があります。自分たちを含めて、ほとんどの人が英語を話すようになり、アイルランド語を話すのは、ほんの少数になってしまった。

先日アイルランドでは、ＥＣ統合についての国民投票があったが、約70％の賛成票があったのは、近隣のヨーロッパ諸国との経済交流なしではやっていけないから。

でも、たとえ、ＥＣ統合があっても、アイルランドはアイルランド、その独自性を保つことが大切ですね。

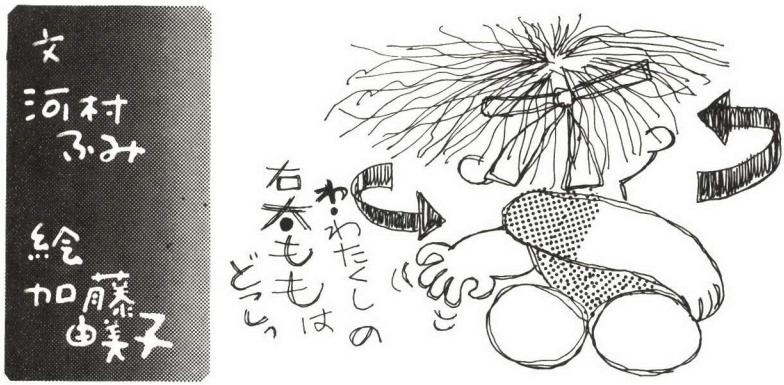
（二十代後半の男女・共にアイルランド出身、英会話学校講師）




頑固な肩凝りは、肩ばかり局部的に揉んでもほとんど効果がないことは経験のある人ならよくご承知だと思います。肩が凝るというのは、まず、頭の使い過ぎだと思っていいと思います。かといって、頭を使うのをやめるわけにはいきませんから、それなら、足のほうも同じように使えばいい。可能な限り、足にやさしい靴を履いて、三十分から四十分くらい歩くことをお勧めします。

先日参加した樹林気功でも、上半身の故障は下半身で、下半身の故障は上半身で治すということをいっておりました。映画「ワーキング・ウーマン」でも、ヒロインが、出勤はスーツにジョギングシューズで、勤め先に着くと、ハイヒールに履き変えるところを、カメラはしつこくアップで追っておりましたっけ。ほんとは仕事している時間のほうが長いのですから、その間だって楽な履物のほうがいいのですけどね。私はこれから夏はワラ草履を履いて、パンツでキメようかと思っているところです。

ついでに、歩き方も言っておきますと、まず、壁に背中をつけて立ってみます。踵を壁につけ、足の親指に重心をかけると、背中は壁から十センチほど離れます。手は腋より前のほうへ自然にぶらさがります。足は外股より、少し内股のほうがいいようです。そのままだと、前に倒れそうになりますから、倒れないように足を一歩踏み出す。それを繰り返すと歩くことになります。膝の力は抜いて、なるべく大股で軽快に歩きます。たまに、上半身は全く動かさないで、下半身だけで体を運んでいる人がいますが、




できるだけ体全体で歩いているという感じがいい。内蔵も揺らして歩くという感じ。そんなふうにして三、四十分歩くと、胸の凝りや肩の凝りが自然にとれ、重心が下に降りてきなあと感じられます。

一日、机に座りっぱなしの人は、座ったままで、時々次のポーズをやってみてください。

**【握りのポーズ】** 背筋をのばし、右手を肘を折って肩から背中にまわします。肘を耳につけるように。左手は肘を折って下から背中にまわし、両手をつなぎます。つなげない人は、そのつもりになるだけでいいです。その反対もやります。四呼吸か六呼吸つけることもお忘れなく。床に座れる時は、足も絵のように交差させるとより効果的です。右足が上にきている時は、右手が上からです。

何をしても治らない頑固な肩凝りは、腰骨のねじれからきている場合もあります。試しに、次のポーズもやってみてください。

**【やさしいねじりのポーズ】** 正座します。両膝の間隔はにぎりこぶし二つ分。背筋をのばし、肩の力を抜きます。右手を左もものわきへ、左手は後ろからまわして右ももの上へ。顔も左にまわしてできるだけ後ろを見るようにします。その時首を傾けないように。これは目の運動にもなります。

それにしても、暑いですねえ。冷房で体を冷やして夏風邪などひかないように、元気に夏を乗り切ってください。こんな症状で悩んでいるという方、どうぞ、お便りください。

# 読者の広場

四月号巻頭の「男を尋ねる」の篠原睦治さんには、八年前に家庭教育講座の講師としてお世話になりました。

「心理学の先生から何かいい話が聞けるだろう」と思って参加した母親たちの何げない質問や自己紹介の中からたくさんの問題を拾い出し逆に問いを返し、「考えさせられた」「おもしろかった」と魅かれた人と、反発する人とに分かれてしまったのが印象的でした。

体外受精についてや、障害児について語り合っていたときに、「篠原さんは男だから」「自分の子が障害児だったらどうか」というような言葉に対して、「女だけで言っちゃ困る、男のぼくにも考えさせろ。〝立場が違うから、わからないことがあるから言うのをやめよう〟っていうのは、きれいだけど、逆に言えばずるい」「みんな人さまざまの立場をしょって、相手と替わることはできない状態で生きていくのだからこそ、よけいがんばれる気迫が生まれる」「自分の立場にきちんと立っていないと、お互いの関係を切ることしかなくなる」。そして「違う立場であっても、子をいとおしいと思う気持ちなど、親なら持っている普遍性で横につながっていけるのではないか」などと、話されていました。

問い返されて、反発してしまった人は、私たちが知らずに持ってしまっている優生思想のようなもの（人を優劣や上下でみる、と言って悪ければ、〝してあげる立場〟と〝してもらう立場〟に分けて考えるようなこと）から抜け出せないところがあって、善意のつもりなのに、どうして責められるのか、というような気持ちだったろうと思います。

時の経過とともに、いろいろな場面で、篠原さんの問い返しが意味を持って思い出されます。誌面の都合もあってでしょうが、インタビューの内容も全部載っていなくて残念。ぜひ、また、誌上への登場を期待します。（東京・柊沢裕子）

◇

高校を中退した息子と一緒に、職を捨てて上京してきたのは五年前でした。

五年前のある日、わたしは佐倉の国立歴史民族博物館にブラリと出かけてみました。数ある展示物の中で、わたしの目をひきつけたものは、市川市の姥山遺跡にある竪穴住居を復原したものでした。四体の人骨が折れ重なり、やや離れた一体と合わせ、五体の人骨が語りかけてくるのです。その言

葉を聞き取ろうと、わたしはその後、佐倉を二度たずね、姥山遺跡にも足を運んでしまいました。

縄文時代の中期といいますから、四〜五千年前ということになります。展示のプレートには『……住居内で家族が不慮の死を遂げたと考えられる遺体群は、老年の女性一体、青年の男性二体、成人の女性一体と子供一体…』という文字が見られました。青年の男性二体は、成人の女性一体の二人の夫かもしれません。家族の形態は、おそらく今とは違うものであったのでしょう。にもかかわらず、わたしをひきつけたのは、一つの囲炉裏のそばで共に死ぬことを引き受けざるを得なかった運命共同体としての家族の姿なのでした。それは、厚い時間の層を越えて、わたしを励ましてくれたのです。息子と一緒に生きよう！と、わたしは思いました。

家庭の崩壊ということが、よく言われます。家庭は本当に崩壊しているのでしょうか？

わたしは、昭和八年生まれのテテナシゴです。母、母の父母、母の弟二人、わたしと合わせて六人家族の家庭でした。母の死にはじまる家族の病死で、わたしが祖母と二人きりになったのは国民学校五年生の時です。

こういうわたしにとって、父の役目がどうのこうの―母の役目がどうのこうの―だから今、家庭は崩壊しているんですよと言われても、相づちの打ちようがありません。とっくの昔に、オレの家庭は崩壊していたよ。だからどうなのさ、と言わなければなりません。

妻と結婚するまで、わたしには祖母と二人の家庭がありました。創刊号の篠原睦治さんの言葉を借りるならば『縛り合って生きる―せめぎあう共生』が、わたしと祖母の間にありました。

もう一つ、吉田明弘さんの書かれた溝上泰子さんの言葉も拝借しましょう。

『教育の原点は、先に生まれた人間が、後に生まれた人間に、時々刻々生きてみせることだ』

こんなふうに、祖母は生き、わたしを支え、そして死にました。

五月号の『父子家庭の視座から』など、『Ｗｅ』が、このノッペラボーな日本にデコボコをつけようとする姿勢に賛成です。東京大地震でもこなければデコボコにならないのでは、情けないですものね。もっとも、大地震の瓦礫の下で、息子と妻と夫が折れ重なりというのも悪くないと思います。発掘された三体の人骨が、後世のだれかを励ますことになればいいなあ。

（東京・向井豊昭）

◇

大道芸ではないのだけれど、道行く人を呼び止めて「ちょっと見ていってください。

合成洗剤と石けんの違いをご存知ですか？」「こっちがバイオ洗剤で育てたカイワレ大根、こっちが粉石けんで育てたカイワレ大根、毛根のところを比べて見てください」「粉石けんなら素手でも換気扇を洗えるんですよ」と、何年かやってきて、言いよどんでしまうことが何回かあった。「合成洗剤は、環境を破壊し、私達の身体に害を及ぼす危険があり、胎児や精子に対する害もあるから避妊薬にも使われているのよ」。

相手の、ああ、なんてショッキングな忌まわしい話を聞いたという表情。こんなことが石けんを拡めるのに効果的なのか、合成洗剤の催寄性について語っている私は、もしかして障害者を排除しようという優生思想の権化ではないだろうか……。

そんな迷いが出てきた頃、息子が、小学校の三年生となり、住んでいる地域の学習ということで町工場の見学を始めた。同級生の家のプレス・メッキ・銑鉄工場を見学したり、バングラディッシュの人も働いている皮革工場へ行ったり、面白そうだと思っていたら、夏休み前の保護者会で、「二学期には、豚の解体を通して生命から生命が育てられることを学んでいきたい」と説明があった。

ビデオで、豚の解体の過程や食肉市場の人たちの様子を見て、「カワイソー、お肉が食べられない」と言っていた子たちも、ハンバーグを作り、腸を使ったソーセージを作り（何人かの母親が手伝った）、ラーメン屋さんのお父さんに来てもらって、豚骨スープのラーメンを食べ、〝豚さん〟の生命によって自分たちが生かされていることを体験した。

食べるばかりでなく、子どもたちは、皮革工場からもらってきた原皮を鞣し、染色をし、クリスマスには素敵な革袋ができた。

また、豚の脂を使って、一人一人の子が、アルコールランプで、ビーカーの中の脂と苛性ソーダーをかきまぜ固めて石けんも実際に作った。

いろいろなものを作る体験をクラスの皆ですれば、一人一人一つ一つの出来上がりはそれぞれだ。生命とは様々な違いを育てていく力なのだから、本来の自然の中では、時には変異をも産み出し包含しているはずではないだろうか。

たとえ原料に天然のものを使用、とうたっていても、合成洗剤ができる複雑な工程の中で、生命の連続はあちこちで断ち切れてしまう。合成して作り上げられること、均一化して与えられることが、私達をもあるがままに受け入れようとしない社会をつくっているのではないか。

このことを息子の授業を通して再認識した時、ようやく私は、石けんを拡めてゆく支えを見い出せたと思った。

（東京　大仏レア）

◇

私は、昨年十二月に、九年間勤めていた会社を思い切って退職し、何かしたいと思いながら、何だか、いろいろなことのふんぎりがつかず、どうしよう、どうしようの毎日でした。（昨日、ちょっと決心がついたので過去形にしました）

県内の大学を卒業して就職した地元の大手量販店で、いわゆる総合職として無我夢中で仕事をしてきた九年間。無意識のうちに、男の人と対等にやるんだと力んでしまっていたようです。「女だから…」とか言われると、思わずカッとなったりしたこともしばしば。それでも、多くの男性、女性に助けられ、何とかある程度の仕事はこなせるようになっていました。すると今度は、何だか仕事に物足りなさを感じ始め、会社の進むペースがあまりにも遅いように思え、自分の中の焦り―このままあと十年今の仕事をしていて四十になった時、自分はもう世間では使いものにならないのではないかという焦りを抑えることができなくなり、まるで、行き先のはっきりしない大きな船から海へ飛び降りるように、会社を退職してしまいました。

『Ｗｅ』では、私が今一番気にしていることを、いろいろな立場から論じていてくれて、何だか助けられます。「ああ、こういうふうにも考えられるのか」とか、「私は今まで、恐くて目をそむけていたかな」とか、とても気づかされました。また、創刊号で、小平さんが「科学的な側面と生活者という立場の両面から考える」ということを言っていらっしゃいますが、これが私のしたい仕事に少しひっかかり、面白く読ませていただきました。

また仕事の話にもどりますが、これまで会社の中で仕事をしてきて、いつも疑問に思っていたことは、あまりにも情報に流され本当の生活者とかけ離れてしまっているのではないかということでした。会社の中で、ゴミ問題とか、エコロジーとか言って論じていても、何か、生活から離れたところで考えられているという気がしてなりませんでした。「男の人は生活がないからわからないわよね」と言っていた私たち女性社員も実際には、エセ生活者であり、本当に自分の問題として考えていなかったように思えます。

今、私としては、この名古屋で、生活者と企業の間に立った仕事ができないかと考えています。甘いかもしれないという不安もあります。そして、夫に私の仕事を受けとめてもらえるかという不安もあります。子どもができたときに（あと二年くらいは欲しくないのですが）仕事と子育てをどうこなしていくのかという不安もあります。が、不安を数えていても始まらないので、できることから始めようと、昨日、おそるおそる腰をあげたところです。

これからも『Ｗｅ』を楽しみにしており

ます。夫にも「これ、おもしろいから読んでみて！」とさりげなく目につく所に置いているのですが、夫は「また、おそろしいような雑誌をとり始めたねえ」と、なかなか手にとろうとはしません。が、私はこれからもさりげなく目につくところに置いておくつもりです。（名古屋　中川恵理）

◇

『Ｗｅ』六月号読みました。一番面白かったのは、日高敏隆さんへのインタビュー。動物界から人間を見たときのおかしさは貴重です。

北海道にいたころ、わたしは「星の目からこの世を見る」ということを心がけていました。こまった時、わたしはよく、夜空の星をながめて、チッポケな自分の悩みを払い飛ばしたものです。東京にきて一番困るのは、この世を相対化してくれる星空がないことです。

さて、特集の「夫婦別姓と家族の再編」のことですが、ページ数のこともあり、突っ込み不足のような気がしました。特に「家族の再編」という点が、よく分かりません。

家族の再編というと、わたしは天明三年の浅間山の大噴火のことを思い出します。東京に来て間もなく、観光バスで浅間山に出かけた時、バスのガイドさんから、こんなことを聞きました。

火砕流で村ごと埋められた鎌原の人たちは、家族を失った子どもや老人、夫を失った妻、妻を失った夫たちを組み合わせて、新しい家族を作り、村を復興したというのです。

バスの中で、この話を聞いた時、スゴイ！と思いました。今なら、さしずめ、老人ホームや、孤児院に送られたことでしょう。諫山陽太郎さんのお言葉を借りるなら、「福祉なき社会の福祉」としての家の再編であったかもしれません。しかし、社会的強者が税を支払い、国家が税を操作して、社会的弱者に福祉として役立てるという現在の社会福祉は、顔のない福祉、体温、体臭のない福祉に傾斜しがちだと思うのです。万止むを得ずとられた鎌原の人たちの措置は、その直接性の故に、スゴイものです。

鎌原村の高台にある観音堂は、そこに逃げてきた人たちを、その高さのために救うことのできた場所として有名です。観光バスは、そこにとまる予定でしたが、時間の都合で通り過ぎてしまいました。

後日、わたしは汽車に乗って、一人で村をたずねました。観光道路から外れた村道を歩いていると、向こうから、小学生らしき女の子が一人、プールの道具を下げて歩いてきました。女の子は、アヤシイおじさんに、澄んだ声で「コンニチワ！」と、あいさつしてくれました。

道を外れ、八幡宮の境内に行くと、まだ学校に入っていない年齢の男の子が三輪車にのっていました。男の子は、「オハヨウ

ゴザイマス！」と、声をかけてくれました。既に時は昼でした。男の子は、男の子のことばで、わたしをもてなしてくれたのです。

まだ遅くはないと思います。コンニチワといい、オハヨウゴザイマスと声をかける子どもたちが、この日本のどこかに残っている限り、日本の再編、そこに住むわたしたち家族の再編は可能なのでしょう。

忘れかけていた鎌原を思い起こさせてくれた『W』eという雑誌はすばらしいものです。ありがとうございます。

（東京　向井豊昭）

◇

〝くらしと教育をつなぐWe〟ありがとうございました。何とも言えず、嬉しかったです。体の中のよどんでいたものが、出ていくようでした。特に「家庭科ー遊ゆう・或わく」「オホーツクの…」「家庭科は人生科」「リレーエッセイ」よかったです。

そうそう、社会や理科の立場からの発言も、男の人の家庭科への想いが伝わってきてよかったです。（私の職場では、こういう考えの人にはなかなか会えません）「教師の人権感覚」も私の中の想いと一致していました。それから、「地域の暮らしと家庭科教育」今後楽しみです。

私は、農村の生まれで、今も、いわゆる「何もないいなか」で暮らしていますが、この生活がとっても大事なものをもっているように思えていたのです。「何もない」ってとっても人間が豊かになる上で大切なんじゃないのか…という思いが心の中にありました。これって、若者らしくない？ただの懐古主義？保守的なのかなとか思いましたが、このタイトルを見て、ほっとしました。「知恵の豊かさ」ってことば、新鮮でした。（福井　安川早苗）

◇

仕事で、官庁の道路行政PRパンフをつくることに関わっていますが、そこの職員の人たちの〝大局〟ばかり見て、生活に関心を持たない考え方に、ちょっとうんざりさせられています。小ぎれいに整備されて車道も歩道も広く、まわりに適度に緑のあるような道を、「ここちよい」「自然にやさしい」道だというのです。これからは動く歩道だとか大深度地下道だとか広域道路網の整備だとか、どんどんすすめるらしいのです。聞いていると、日本がハチの巣のようになってしまいそうです。

高速道路をつくることも渋滞の解消→排気ガスの減少→自然保護だというのですから、理屈なんてどうにでもなるとしか思えません。せめて、将来イメージの場面で、あまり無機的な理想にならないよう思いをこめるのが、せいいっぱいの筋の通し方です。（神奈川　杉山百合子）

◇

七月二日の『読者会』に参加しました。あの記事がよかったとか、物足りなかった

とか、どんな反応がありましたか？…なんてことを稲邑さんを囲んで話していると、『Ｗｅ』という一つの雑誌を通してのいろんな人との出会いの妙というか、面白さを感じました。

吉田一平さんのインタビューをめぐって、「子育てをしていて、これ（今の競争社会に子どもを乗せようとしないこと）でいいのかなと不安になった時、これでいいじゃないかと、その気持ちを支えてくれる」という参加者の言葉がとても印象に残りました。

ところで、私が気に入ったのは、五月号の福島瑞穂さんの―いい男はかくも難しい―というやつです。なぜなら、二歳の子と六カ月の子に振り回され、モンモンとしてすっきりしない頭にスーっと染み込んで楽しい気分にさせてくれたから。連れに対する不平、不満でいっぱいのしかめっつらを、ニヤっとゆがませてくれたから。

この文章に「おちょくられている」と怒った方もいらしたそうですが、怒るようでは「いい男」とは言えません。これは男への応援歌であると同時に、男に苛立っている、またそんな自分を棚上げしている女への（私への）応援歌でもありました。

―いい女もまた、かくも難しい―

「すればいいってもんじゃないよ」という点からすると、私の場合は「しろって言ってるばっかが能じゃないよ」ということになります。「おフロに入れて、お皿洗って、何しろ、かにしろ」…追い立てて、いいことはないでしょう。「子育てをする女はセクシーでない」なるほどね…。

天下国家の公的部分で生き、他者への創造力を行使する「女」と、私生活を大事にする「ふぇみにずむ女」とがプラスされ止揚されなきゃね。フムフム…「女から女へ」…女同士足引っ張り合ったりしないで、ドーンと構えて、セコセコしたくないもんです。

女ってずるいとこないですか？差別されてることを声高に言うけれど、おんなをうまく利用してるところもあったり。損だ損だと言って楽してたり、言い訳にしてたり…「高速道路なんて降りなさいよ」と言いながら、自分の「ご主人(？)」には降りられては困ると思っていたり。実際に降りてくれたら、オタオタしたり。

多数派の女性に臆せず主張する人、対の関係で人間的に格闘し、実践している人、口先だけでない人。頭でっかちな「こうあるべきだ」というところがもっと抜けると…。精神の自由さ、これがあってこそ、いい女、というものです。

フーム。―いい女はかくも難しい―

じたばたしながら、私も頑張ろう。これからも『Ｗｅ』を楽しみにしています。また読者会やりましょう。

（神奈川・中村泰子）

## 新しい『Ｗｅ』の定期購読者になって下さい

1982年、半田たつ子さんによって創刊された「新しい家庭科－Ｗｅ」は、「自立した女と男を、人間らしい生活を、差別のない社会を、育み創り出す」という理念を掲げて、従来の家庭科の枠にとらわれずに、学校、子ども、家族・家庭、女と男、働くこと、くらし、環境など、教育やくらしにかかわるさまざまな問題を掘り下げて、読者一人一人の生き方や考え方、ものの見方を問い直し、新しい視点や発想をつむぐ場として、大きな役割を果たしてきました。

また、授業実践や地域の運動を広く紹介しながら、教師と市民をつなぐ場を誌面で提供するとともに、毎年行われるフォーラムや各地の読者の集いなどを通して、多くの人たちとの豊かな出会いの場も育んできました。

その「Ｗｅ」がさまざまな事情から、'92年2･3月合併号で発刊を終了しました。この１０年の間に、家庭科をとりまく状況は大きく変わりました。家庭科の男女共修が本決まりとなり、家庭科は〈女と男の家庭科〉として新しい時代を迎えようとしています。このような状況の中で『Ｗｅ』がなくなるのは、何としても残念であり、私たちは、「Ｗｅ」の１０年間の歴史と実績を引き継いで、今までの『Ｗｅ』誌とともに歩んできた「Ｗｅの会」を発行母体として、「Ｗｅ」の灯をともし続けることにしました。

「自立した女と男を、人間らしい生活を、差別のない社会を」という「Ｗｅ」の基本的な理念はそのままに、「くらしと教育をつなぐ」という視点を新たに加え、〈女と男の家庭科新時代〉にふさわしい内容を盛り込んだ雑誌を創ってゆきたいと考えています。

ところで、洪水のようにあふれる情報の中で、人々のくらしの実感に基づいた手づくりのメディアを出し続けるには、実際のところ、大変な覚悟と労力、そして経済的な支えを必要とします。最低でも千名の読者（定期購読者）がいないと、この新しい雑誌の発行を続けることは困難になります。新しい『Ｗｅ』は、読者の一人一人のすべてが読み手であると同時に、書き手であり、そして売り手でもあるような雑誌を目指してゆきたいと思います。

この雑誌は一般の書店のルートには乗せられませんので、読者による直接購読の申し込みによって支えられます。あなたもぜひ定期購読者になってください。そして、新しい読者を一人でも多く紹介してください。この新しいメディアを一緒に創り、育てていく仲間になってください。

『Ｗｅ』発行人 Ｗｅの会

♠夫が赴任中のブラジルへ娘を送り出し、中三の息子と私が残った。この夏は地球の北と南に分かれて暮らすことになる。さて、頑張るゾ！と思ってはみたものの、あまりの暑さに、受験生の息子といつの間にか映画「紅の豚」行きの相談がまとまっていた。ところで、Weの“猫の手”役は悪くはないのだが、結構忙しくて時には足まで出演する羽目になる。話が違うと言いたいのだが、“仕事をしない猫はただの猫さ”（「紅の豚」より）と言われそうで……。（石海）

♥暑さに弱い私は、この猛暑には参っています。といって、クーラーは嫌いだし。「家庭科－遊ゆう・惑わく」のシリーズは大変興味をもって読んでいます。

強姦や売買春の問題は、女性の人権を考えるのに大切な教材だと思います。多くの問題が含まれているだけに難しい。私たち大人が、この問題の中にある差別構造をどれだけ理解できているのでしょうか（もちろん、私を含めてです）。

生徒たちの感想が、とても新鮮でした。（石橋）

♣私は暑い夏が決して嫌いではありません。暑い暑いと言いながら、家には絶対クーラーを入れないでがんばっています。

今も、首にタオルを巻いて、短パン姿。百年の恋も一遍で冷めるような格好で、ワープロに向かっています。

東京の夏は皆がクーラーを使って熱気を外に出すので、年々ひどくなります。男の人たちはなぜ、夏に上着を着て、クーラーをきかせているのか。エネルギーの無駄使いとしか思えない。それを考えるとよけい熱くなってしまう。（河村）

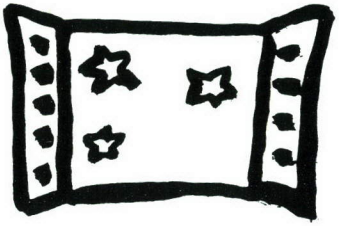
◆週一回WE編集室に行き始めて約三カ月。私は役に立っているんだろうか。却って、中途半端なかかわり方で、迷惑をかけているのかしらと考え始めると苦しくなった。そうこう考えている内に、私は、編集室に行って、今まで全く知らなかったことや、私の価値観とは違う、別の価値観もあることを知り、とても楽しかったことに気づいた。編集室とのかかわりが楽しいから行く、それでいいじゃない、と思えたら、気持ちがスーッと軽くなり、やっとこの文章が書けました。（有坂）

◇帰省した折り、三十年振りに高校時代の同級生に会った。「ちっとも変わってないじゃない（？）」と言い合った後、彼女、「ね、ね、聞いて。先日ね、独身と間違われてね、それも、『お嬢ちゃん』ときた。『やだぁ、私三人の子持ちですよ』って答えて、それでよしときゃよかったのに、つい、『おばあちゃんは町へ買い物ですか』って聞いたら、『ええ、眼が悪くてね、眼科へ』だって」この愛しき友とさんざん笑いころげながら、一遍に二十年をタイム・スリップしていました。（小松）

★お蔭様で、購読者数も順調に伸び、五月号も、三百部増刷した創刊号も品切れに。「（増刷は）もういいね。くたびれたしね」と、私と河村さん。そこへ、関西の元気な方たちから「二百部増刷すべし」との檄がきて…。どうせやるなら、と、五百部ずつ増刷することにしました。またしても、「前進あるのみ」のほうに賭けたのですから、さあ、売らなくっちゃ。皆様どうぞ、ご協力ください。何冊かまとめて預かってくださる方募集中。購読してくださりそうな方のご紹介もぜひ。（稲邑）

くらしと教育をつなぐ－We
Vol.1 No.5 1992年8月16日発行
定価500円（本体485円）
年間購読料／定価7500円（送料共）
発行／Weの会 編集／稲邑恭子 河村ふみ 印刷所／（有）イー・エム・ビー
〒225 神奈川県横浜市緑区市が尾町1161-8
共学舎内 ☎・FAX 045(974)3101
郵便振替 東京3-754314 WE編集室
三菱銀行 大久保支店 普0264724
〒102 千代田区飯田橋2 5 2

発刊以来、大反響！
分身のような「新しい家庭科ーWe」
から降りた著者の思いを、
あなたはきっと理解なさるでしょう



# 喪の作業

## ―夫の死の意味を求めて―

半田たつ子

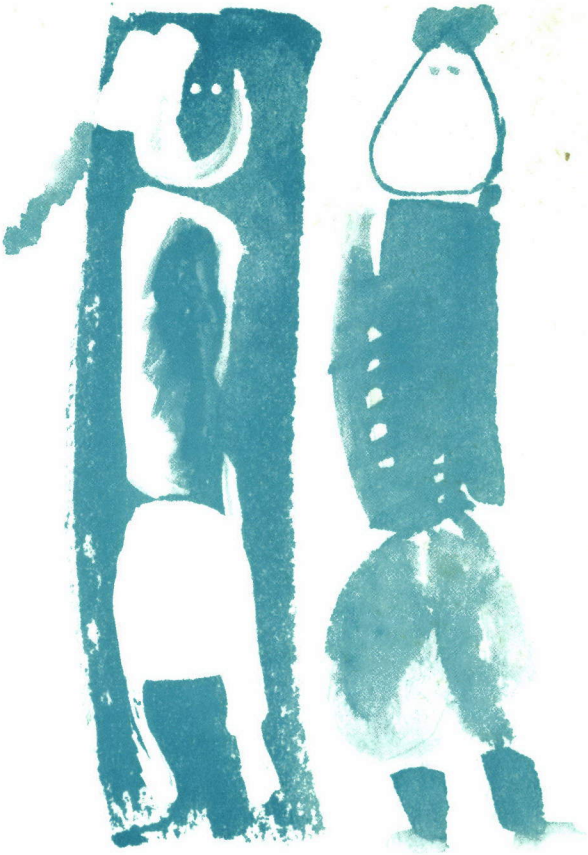
**定価 1200 円**（本体 1165 円）

## Weバックナンバーを特別価格で！

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| Vol. 5 86年度 | 4月号 | 幼い日―大人は忘れてしまった | 11月号 | 家庭科―どう変わるどう変える |
| | 5月号 | 子ども―大人の勝手な思い込み | 12月号 | 平和―今年を顧みる |
| | 6月号 | いじめ―その根っこには何が？ | 1月号 | 女性―世界を変え得るか |
| | 7月号 | 性―小・中・高校生は何を思う？ | 2・3月号 | 明日―人はみな、成熟に向かって |
| | 8・9月号 | 親―いま、学校に何ができる？ | 夏増刊号 | こどもたちへ―大人になる旅 |
| | 10月号 | 家庭科―いま新しい地平に立つ | | |
| Vol. 6 87年度 | 4月号 | 先生は悩んでいる | 12月号 | 国際居住年って、何だった？ |
| | 5月号 | 情報化社会の光と影 | 1月号 | Weのルネッサンス |
| | 6月号 | 学校給食で論争しよう | 2・3月号 | 新教育課程と家庭科・生活科 |
| | 7月号 | 「制服」着る、着せられる | 夏増刊号 | 女たちの教育改革提言 |
| | 8・9月号 | 「原発」知らなくていいのか | 冬増刊号 | ゆたかさを紡ぐ―山形のくらしから |
| | 10月号 | 機会均等法、何が変わった？ | | |
| Vol. 7 88年度 | | | 12月号 | マスコミと文化の変容 |
| | 5月号 | 学校―絶望？　希望？ | 1月号 | くらしの論理を創る |
| | 6月号 | 学校―今、親にできること | 2・3月号 | 上すべりの"国際化" |
| | 7月号 | なぜ、家庭科にコンピューター | 夏増刊号 | 教育はどこへ |
| | 8・9月号 | コンピューター、何をどう変える | 冬増刊号 | ゆたかさを紡ぐII―ひとがひとと向き合うところで |
| | 10月号 | 食と環境といのち | | |
| | 11月号 | いのちを医療に任せていいのか | | |
| Vol. 8 89年度 | 4月号 | 何をねらうか「生活科」 | 11月号 | からだ―その不思議 |
| | 5月号 | 内申書―その功罪を問う | 12月号 | コミュニケーション―私をひらく |
| | 6月号 | 家庭科―何を評価するのか | 1月号 | フェミニズムの"いま" |
| | 7月号 | 生涯学習社会はバラ色？ | 2・3月号 | 教育の中の性差別 |
| | 8・9月号 | 地球市民として生きる | 夏増刊号 | 家庭科の可能性を探る |
| | 10月号 | 食べものから地球を見る | 冬増刊号 | ゆたかさを紡ぐIII―自然との共生を求めて |
| Vol. 9 90年度 | 4月号 | '90年代、学校を変えよう | 11月号 | 高齢化社会がやってくる |
| | 5月号 | 生、そして死に迫る教育 | 12月号 | マス・メディアは何処へ |
| | 6月号 | 「家庭生活」をどう語る | 1月号 | 性役割の固定化は揺らいだか |
| | 7月号 | 「環境・資源」を見つめる | 2・3月号 | 新しい家庭科を創る |
| | 8・9月号 | 消費者教育は、何を目指す？ | 夏増刊号 | 家庭科が変わる―情報化のうねりの中で |
| | 10月号 | 地域をよみがえらせる | 冬増刊号 | 出会いは歴史をつくる―アジア・子ども・人権 |
| Vol.10 91年度 | 4月号 | 教師という仮面を脱ぐ | 11月号 | アジアの中の私たち |
| | 5月号 | 少年・少女の現在 | 12月号 | 地球再生へ向けて |
| | 6月号 | 心からからだへ | 1月号 | 揺らぐ家庭 |
| | 7月号 | 生と死を授業で | 2・3月号 | 男女共生の道を拓く |
| | 8・9月号 | ひとと生殖 | 夏増刊号 | 高齢化社会、そのデザイン |
| | 10月号 | 売買春の構図 | 冬増刊号 | 出会いは歴史をつくる―遠いとっとあう |

★Weのバックナンバーを特別価格でお分けします。人手がないため、振替で前金の場合に限り10冊以上…1冊300円、20冊以上…1冊200円、振替用紙の裏にVol.と月号をお書き下さい。数冊しかない号もありますので、品切れの節はお許し下さい。この特別価格は今年の12月末までです。

ウイ書房　〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14
☎・FAX 03-3326-1380 振替東京6-59867



くらしと教育をつなぐＷｅ　1992年8月16日発行　第1巻第5号
定価５００円（本体４８５円　年間購読７５００円送料共）